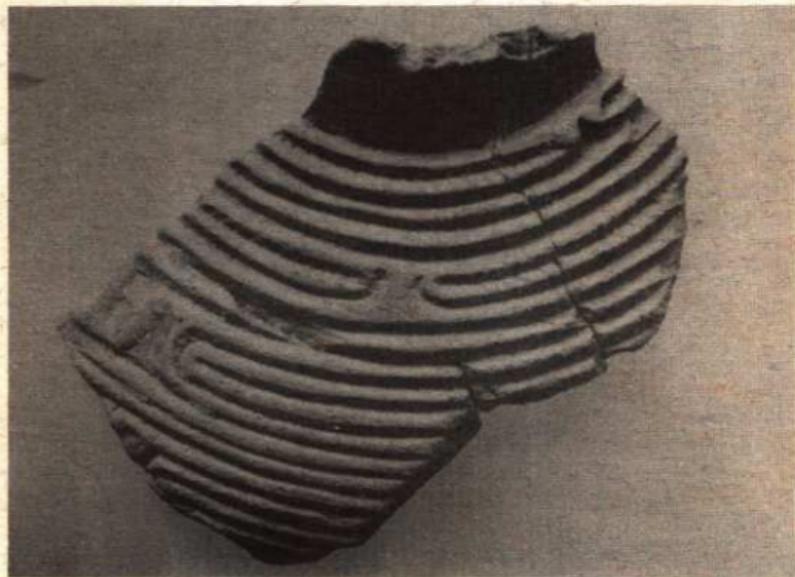


五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集

觀音林遺跡

(第二次発掘調査報告書)



【観音林遺跡（第二次）出土 大洞A式土器】

1984. 3. 20

青森県五所川原市教育委員会

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書

- | | | |
|------|------|-----------|
| 第1集 | 1968 | 津軽・前田野目窯跡 |
| 第2集 | 1974 | 原子遺跡 |
| 第3集 | 1975 | 觀音林遺跡① |
| 第4集 | 1979 | 狐野遺跡① |
| 第5集 | 1980 | 狐野製鉄遺跡② |
| 第6集 | 1983 | 福泉遺跡 |
| ◎第7集 | 1984 | 觀音林遺跡② |

序 文

五川原市教育委員会 教育長 鈴木太左衛門

縄文晩期におけるみちのくの華といわれる亀ヶ岡文化の遺跡が当市松野木観音林にも発見されたのは昭和48年のこと、翌昭和49年8月1日より早速第1回発掘調査にかかり、8月20日に終っている。その結果については昭和50年に「観音林遺跡」の記録として公表したところである。

昭和58年8月4日より8月17日まで第2回発掘調査を実施したが、いよいよこの遺跡の重要性が認識され将来とも調査を継続する必要性を痛感するに至った。

本冊子はその記録の一部であるが、当地方の古い時代を知る上でも、また、先人が果し得た文化的遺産を知る上でもお役にたてば幸いである。

今回の調査にあたってご協力ご援助下さった皆様方並びに地主長尾良治氏のご好意に対して深甚なる謝意を表します。

例　　言

1. この報告書は、五所川原市教育委員会が実施した「観音林遺跡」の第二次発掘調査の記録である。本遺跡は、五所川原市大字松野木字花笠81番地に所在する。
 2. 発掘調査は、昭和58年8月4日より同年8月16日の期間で実施した。
 3. 本報告書のうち、地学に関する事項は、川村真一が担当執筆した。その他は新谷雄蔵が担当執筆した。
 4. 測量・原図の作成は、太田、永沢、小山、小野、小島、菊池の各調査員が担当し、あわせて発掘の指導をも担当した。
 5. 原図のトレースは、菊池、新谷が担当し、地層断面図の総括は、川村真一が担当した。
 6. 主管課長以下、市職員は人員の輸送、資材の管理を担当し発掘を援助した。
 7. 出土遺物のうち、骨類・堅果類、陶片の鑑定は、日本大学講師金子浩昌氏が担当した。ここに記して謝意を表する次第である。
 8. 発掘に当っては、県文化課、県立郷土館の御指導を賜った。とくに鈴木克彦、天馬勝也氏の御指導をいただいた。ここに記して謝意を表する次第である。
 9. また、応援発掘に参加された、飯詰小・中、五一中、松野木小、出野里小各校の児童・生徒、および引卒の各先生方に謝意を表する次第である。
 10. おわりになりましたが、地主である長尾良治氏の理解ある御協力に感謝の意を表します。
- ※発掘出土品は、すべて五所川原市教育委員会（市立歴史民俗資料館）が保管し、陳列公開して市民の文化財保護思想の啓蒙に役立てる。

※遺跡の性格上、土器類の出土層位は、基本的に「B層-Ⅱ・Ⅲ層」が晚期の土器、同じく「B層-Ⅳ層」が後期の土器群の包含層である。（資料には出土層位は表示していない。）

目 次

序 文

例 言

写1～7→A・B・C地区グリット・スナップ	1～5
第1図→観音林遺跡遠景、地形図	6
F・P・L 1～8→完形土器写真	7
(I) 調査に至る経過と調査要項	13～15
第2図→基本層序図	16
第3図→発掘地点とグリット配置図	17
第4図→C地区発掘区平面図	18
第5図→A地区F3西壁セクション図	19
第6図→A地区F3北壁セクション図	20
第7図→B地区北壁セクション図	21
第8図→B地区東壁セクション図	21
第9図→C地区南壁セクション図	22
第10図→C地区西壁セクション図	23
(II) 地形・層序	24～25
(III) 出土遺構	26～31
第11図→B地区遺構実測図	32
第12図→C地区遺構実測図	33
第13図→C地区粘土堆実測図	34
第14図→D地区掘状遺構セクション図	35
(表1) 編文時代編年表(含観音林遺跡第一・二次)	36
(N) 出土遺物	37
(1) 土器・土製品(A地区・B地区・C地区・D地区出土)	37～40
(表2) 観音林遺跡出土石器・石製品一覧表(第二次)	41～46
(2) 石器・石製品	47
④ 器種 ⑤ 岩質	47～48
(表3) 骨片・堅果類・染付陶片鑑定結果一覧表	49
(3) 骨片・堅果類・染付陶片	50
(V) 考 察	51

章(土器資料)→	A地区出土	P・P・L1~10	55 ~ 64
	B地区出土	P・P・L11~17	65 ~ 71
	C地区出土	P・P・L18~26	72 ~ 80
	D地区出土	P・P・L27~28	81 ~ 82
	C・D地区出土須恵器	P・P・L29	83
	C地区出土土師器	P・P・L30	84
	B・C・D地区出土(台部・袖珍土器) P・P・L31	85	
	A・C地区出土円盤状土製品	P・P・L32	86
	C地区出土製塙土器	P・P・L33	87
章(石器資料)→	S・P・L1~29	88 ~ 107	

章(骨類・堅果類・染付陶片資料)→	b・P・L1~3	108 ~ 110
-------------------	----------------	-----------

(参考資料)

章昭和5.3年発掘孤野製鉄遺跡炉内出土鉄塊分析表	111
--------------------------------	-----

章参考文献

(A地区) → (F₁・G₁・G₄)

(写1)

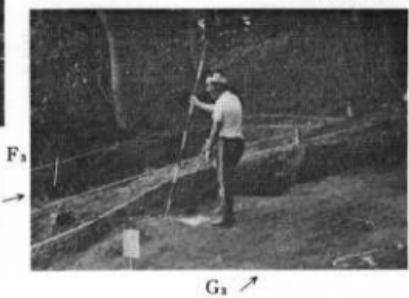
1. A地区発掘最終日の状況

(東より)



2. 同 左

(東南より)



(B地区) → (G₁・G₂・G₃)

(写2)

1. B地区最終日の状況

(南より)



2. 同 上 (土塊群)

(北より)



[C地区] → (H₁ + H₂ + H₃)

(写3)

1. H₃-11の状況(柱穴状pit)

(東より)



2. H₁-10の状況(壁面とpit)

(南東より)



[D地区] → (K₁ + K₂)

(写4)

1. K₂の状況(空堀のトレンチ)

(西方より)



2. 同 左 (実測:川村・太田・菊池)

(北西より)



(遺物の出土状況)

(写5)

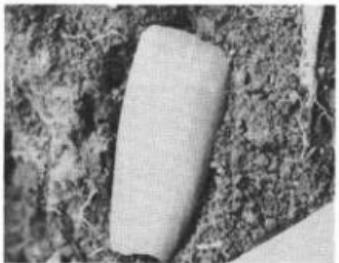
① 土偶脚部



② 石 鏁



③ 石 斧



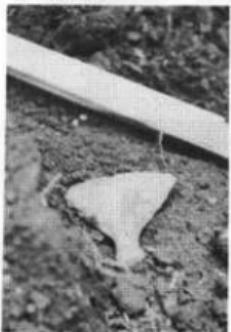
④ カマド址



⑤ 土器片



⑥ 削 器



[発掘スナップ] →その1 (①～⑤=C地区、⑥=B地区)
(小・中学生も大人も頑張る！)

(写6)

①慎重に掘りすすむ



五工高生・飯中生のがんばり！

②C地区 トレンチ近景



③遺物係は忙しいぞ！



調査員の指導をうけて

④出野里小・飯詰中・五一中生、
それぞれ1グリットを！



大人の見学者も思わずびっくり

⑥B地区の実測風景 (太田・小山調査員)



⑤指示に従って一生けんめいに！



[発掘スナップ] →その 2

(写7)

(①・②・⑤=A地区、③=D地区、④・⑥=C地区)

①A地区の第Ⅰ層から遺物が出る

(佐藤、山川)



②A地区F₃で(中村・松野木小生)



③D地区・トレンチの中で大人も汗を／＼



④C地区・浅木校長の指導を受ける中学生



⑤(五一中生も力を合わせて／＼)



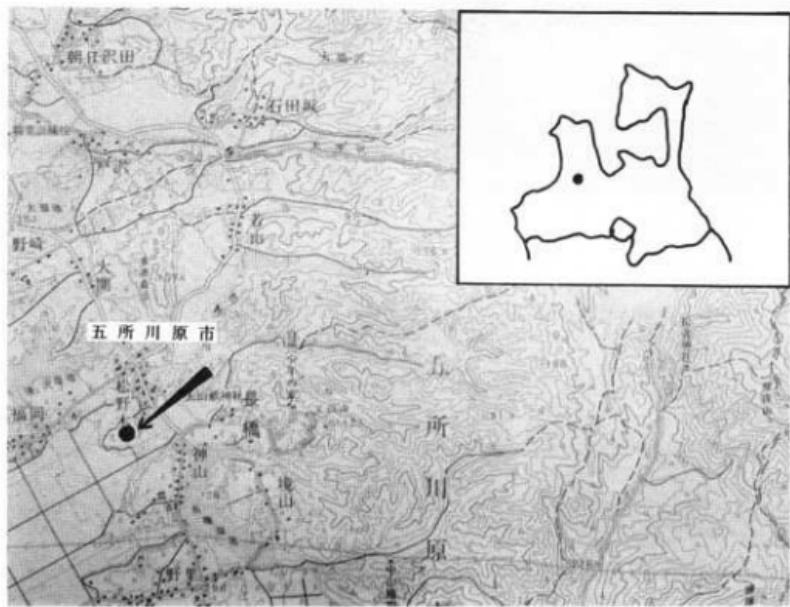
⑥中学生のがんばり(飯中・五一中生)



[第1図] 遺跡遠景・遺跡付近地形図

◇遺跡遠景

(西方より写す)



(1) 〔器台〕→(十腰内I式) F・P・L1



☆〔器台〕→F・P・L1

- ・このものは、A地区F3グリット北壁面近くより出土した。出土層はⅧ層とした疊層より出土したものである。
- ・計測値は、口径11.4cm、現存高5.2cmである。また器台の下部は欠損しているものである。

☆このものは、縄文時代後期初頭「十腰内I式土器」に伴うものである。

(2) 〔壺形土器〕→(袖珍土器)(大洞C2式) F・P・L2



☆〔壺形土器〕→F・P・L2

- ・このものは、小形の壺形土器(袖珍土器)で、C地区H3-11区より出土したものである。出土層は第II層下位より出土した。
- ・計測値は、口径2.2cm、器高3.2cm、底径2.2cm、胴部最大径4.2cmである。

☆この袖珍土器は、縄文時代晩期大洞C2式土器に伴うものである。

(棒状土製品) → (十腰内 I 式) F・P・L 5



☆〔棒状土製品〕—F・P・L 5

- このものは、(F・P・L 4—3)のアップである。
- 計測値は、上端径約2.2cm、現存高4.6cm下端径2cmで、隅丸方形の断面形である。
- なおこのものには朱ぬり痕を認める。

(鉢形土器) → (袖珍土器) (大洞C 2式) F・P・L 3

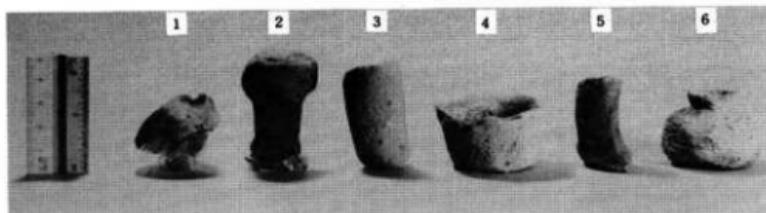


☆〔鉢形土器〕→F・P・L 3

- このものは、小形の鉢形土器(袖珍土器)で、B地区G 3—20の第II層より出土した。
- 計測値は、口径4.6cm、器高2.7～2.2cm、底径3.6cmである。
- このものも(P・L 2)と同様手づくねによって作られたものである。

☆この袖珍土器もまた、大洞C 2式土器に伴うものである(縄文時代晚期)

〔鉢状土器・土偶脚部・棒状土製品・袖珍土器〕 F・P・L 4



☆〔土器・土製品各種〕→F・P・L 4

- ここに掲げたものは、土器・土製品の各種を一括して掲げたものである。
 - (1)は鉢状土器残次、(2)は、下段のアップとともに土偶脚部破片である。(3)は棒状土製品、(4)は(F・P・L 3)に述べてある。また、(6)も(F・P・L 2)に述べた。
 - また、(5)は、土偶脚部破片である。
 - これらのものの出土区・層位を示すと下記のとおりである。
- | | |
|--------------------|--------------------|
| (1)=B地区G 3-20-II | (5)=B地区G 3-20-III上 |
| (2)=C地区H 2-20-II | (6)=(P・L 2参照) |
| (3)=B地区G 2-20-III上 | |
| (4)=(P・L 3)参照 | |

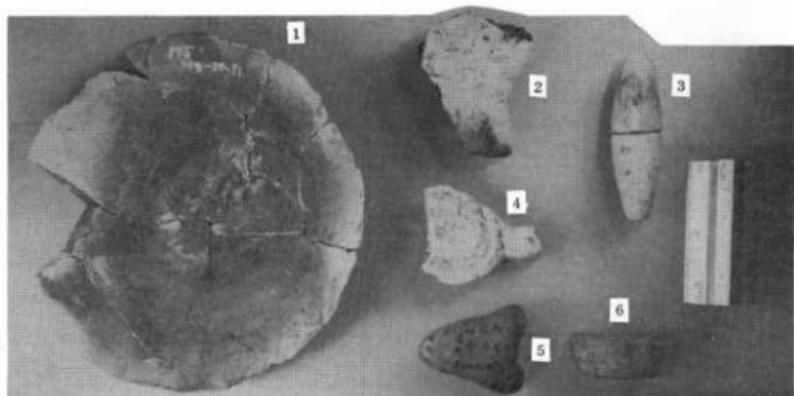
☆註・例→(B-G 3-20-II)とは、B地区的G 3-20区-II層出土の略である。(以下も同じ)

- この1~6について併出土器等から、その型式をつぎに述べる。
- (1)後期、(2)後期、(3)後期、(5)後期一すなわち「十腰内I式」土器に伴うものである。なお、(4・6)は(F・P・L 2・3)で述べた。

☆また、(1)(3)(5)は、後期の土壤直上、および土壤内より出土している。

〔皿形土器、板状土偶、ひしゃく形土器、三角形土製品、土錘・土製腕輪〕

F・P・L 6



☆〔土器・土製品各種〕→F・P・L 6

- ここに掲げたものは、土器・土製品各種であるが、(1)～(6)についてつぎに述べる。
- (1)は皿形土器で、(C-H 3-10・11-III上)出土である。計測値は、口径12.4 cm、器高2.7 cm、底径8.4 cmである。桜井清彦氏の分類による「第二形式」の土器である。(平安時代)
- (2)は、板状土偶の残次であって、縄文時代中期のものである。(C-H 2-10-III上)より出土した。現存長径5.1 cm、器厚1.3 cmで乳房状突起1ヶを見せる。
- (3)は、土錘、(4)はひしゃく形土器、(5)は三角形土製品、(6)は土製腕輪の残次である。
- 出土地点は、(3)=(C-H 1-10-II)、(4)=(C-H 3-11-I)、(5)=(C-H 3-10-II)、(6)=(C-H 3-11-II)である。(註・計測値は省略する)
- (3)～(6)の型式についてつぎに述べる。

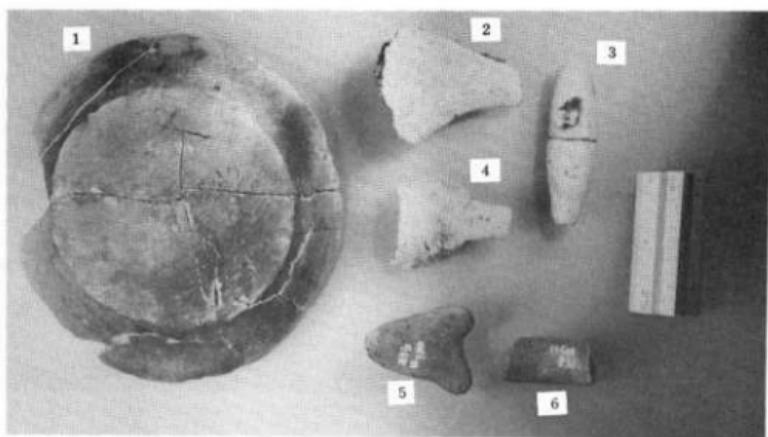
(3)=縄文時代後期 十腰内工式

(4)= タ タ 晩期 大洞C₂式

(5)= タ タ 後期 十腰内工式

(6)= タ タ 晩期 ?

(F・P・L 6 の裏面) F・P・L 7



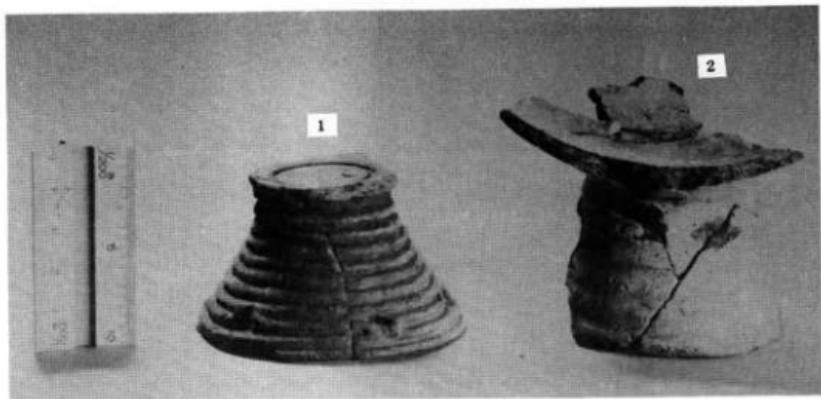
☆(3)は、一部に朱ぬり痕を認めるもので、縄文時代後期初頭「十腰内I式」期の頃より朱ぬりが開始される。また(5)も同時期の特徴的所産である。

☆(4)は、ひしゃく形土器で、当遺跡では、第一次調査においても1例出土があり、他の晚期の遺跡でも若干の例が見られる。

• (1)の底面を観察すると写真では、明らかでないが、回転ロクロによるヘラ切り痕が観察される。この皿形土師器は「第二形式」のうちでも、新しいものと考えられる。御教示を迄う。

• さらに、(F・P・L 4-1)の鉢状土器(つりがね形)、および(F・P・L 7)の三角形土製品は、「十腰内I式」期に盛行し、その後衰えるようである。この問題についてもその原因を追求する必要があろう。

(土器台部 2例) → (大洞A式) F・P・L8



☆(土器台部 2例)→F・P・L8

- ここに掲げた 2 例は、ともに台付土器の台部である。(1)、(2)とも本遺跡では、初めて出土した施文法であるので掲げたものである。
- 特に(1)は、台部に10条の沈線文をめぐらせており、その下位から2.3条が「入組み文」をなし、そこには、2条目と3条目に不整の刺突が裏面まで貫通する窓をついているもので、(対象的に 6ヶ所)当西北五地方では希少な施文法である。
- (2)は、台部に5条の太い沈線文をめぐるものである。なお(1)には朱ぬり痕が認められ、上端中央に円文がある。この施文は、「大洞A'式」に近いものと推定できる。

[I] 調査に至る経過と調査要項

1) 経過

- 昭和48年青森県教育庁文化課が実施した遺跡の分布調査の際当地方を踏査し村人達より聞き取り調査を行ない、それに基づいて現地調査を行なったところ本遺跡を発見したのである。（新谷武・新谷雄藏）
- その後、本遺跡について注目しつづけていたところ、土地改良計画が実施されること、さらに開畠計画があることを地主である長尾良治氏から五所川原市教育委員会に通報があり、そのため、市教育委員会では、本遺跡の規模およびその性格を知るため、第一次試掘調査を実施した。
- その結果については、「観音林遺跡」として既に報告したところである。その結果、「亀ヶ岡遺跡」にも劣らない大遺跡と考えられる発掘成果を得たのである。
- 以来、五所川原市内に所在する縄文時代晩期の貴重な遺跡として、地主長尾良治氏の御協力のもと、鋭意その保存策を講じてきたのであるが、再び開畠計画の申し出があったので、当五所川原市教育委員会は、本格的な発掘調査を実施し、記録の保存と遺物の集中管理を企画することになったのである。

2) 調査要項

① 発掘主体者	五所川原市教育委員会	代表 教育長 鈴木太左衛門
② 主管課	五所川原市教育委員会社会教育課	
	○課長 寺田 勇	
	○副主幹 時田 武則	
	○主任 中村 健	
	○主事補 佐藤 文孝	
（用地課）	○技師補 岩川 和雄	
③ 発掘担当者	・日本考古学协会会员	新谷 雄藏
	・日本地学教育学会会员	川村 真一
	・北奥文化研究会会员	永沢 秀夫
	・〃	太田 文雄
	・〃	岩崎 繁芳

・北奥文化研究会会員	小山 英治
“ “	菊池由紀子
卒副調査員	弘前大学考古学研究生 小野 雅史
	花園大学考古学専攻生 小島 英伸
	弘前学院大学学生 山川 夏子
	五所川原工業高等学校生 太田 竜哉
◎特別参加者	北奥文化研究会長 成田不二夫
	郷土史研究家 豊島 勝藏
	飯詰小学校長 浅木 全一

卒作業員（五所川原市大字松野木）

長尾秀幸・小笠原文敏・小笠原きぬ・長尾きさ・長尾たみ・長内和
長尾由比子・長尾テル・長尾万左衛門

卒応援参加者（一般人）

木村節雄・新岡重利・笹森謙吉・対馬邦夫・工藤市太郎・川口俊亮
太田寿・杉山栄和・山本昭

卒児童・生徒

飯詰中学校・飯詰小学校・五所川原第一中学校・松野木小学校	生徒 児童
出野里小学校	

3) 発掘面積と発掘法

卒発掘面積

A地区 = 73.30 m² B地区 = 33.50 m²

C地区 = 40.00 m² D地区 = 17.00 m²

○合計 163.8 m² (総発掘面積)

卒発掘法

A地区→グリット法	B地区→トレンチ法
{ B地区→グリット法	→グリット法 }
D地区→トレンチ法	

4) グリット、トレンチの設定について

- A地区→A地区におけるグリットの設定は、遺跡の南斜面に、第一次発掘

調査グリットを基点とし、南から北へ $4\text{m} \times 4\text{m}$ のグリットを組み、1～4の番号を付し、また、西から東へ F・G・H の記号を付した。（第3図）

※註、但し、F3グリットは $5\text{m} \times 5\text{m}$ である。

このグリットは、昭和48年の第一次試掘調査のグリットである。第一次調査では、このグリットの第Ⅲ層で発掘を中止してあるのでこのグリットをテストピットとして先行させることにした。

第3図に示したように、A地区では、G1・G3・G4 および既述したF3をテストピットとして発掘した。（G1＝グリット1の意である。）

※註、第一次調査における第Ⅲ層とは、第二次調査における（B層-Ⅲ層）のことである。

・B地区→B地区におけるグリットの設定は、1グリット $4\text{m} \times 4\text{m}$ とし、（第3図）のように、19～22の番号を北から南へ順に付し、また、西から東へ、G1・G2・G3の記号を付した。

発掘は、（G2-20）より始め、西・東・南に拡張区を発掘の進展に従って設定した。

・C地区→C地区では、これも（第3図）に示したように、西より東へ9～12の番号を付し、南から北へH1・H2・H3としてグリットを組み、そのうち、H3-12・11・10・9の南半のみを、南北 $2\text{m} \times 12\text{m}$ としてトレンチを設定し発掘区とした。

また、（H1-10）グリットを発掘し、遺構の検出から、さらに（H1-9）西半分を拡張して発掘した。

・D地区→D地区としたものは、空掘状遺構である。

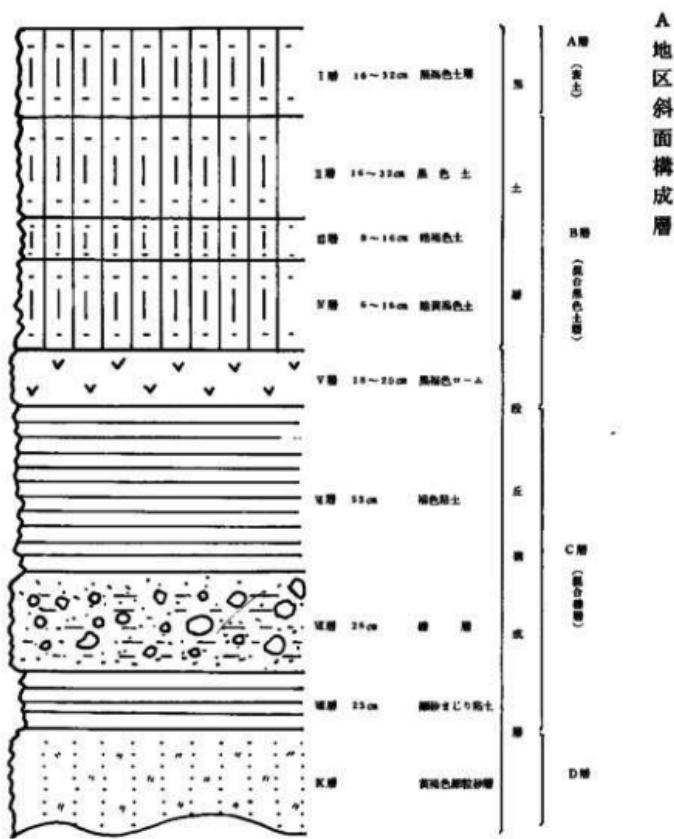
この空掘状遺構に、これも（第3図）に示すように、東西に38～40の番号を付し、北より南へ、K1・K2・K3とし、そのうち、K2-38・39・40の南半に（第3図）のように発掘区（トレンチ）を設定し発掘をすめることにした。

・なお、A～D地区的発掘地点の配置状況は、（第3図）上段のとおりである。また、各地区を発掘した結果、検出された遺構の状況は、グリット計画図に示してある。

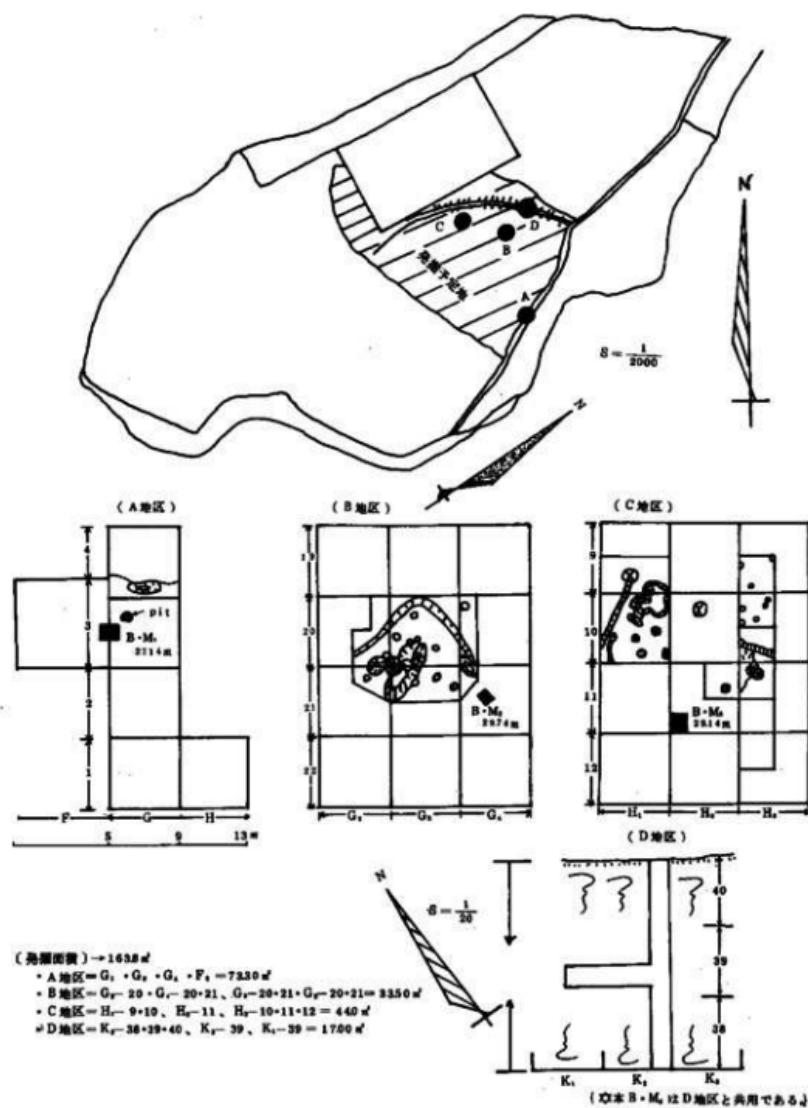
このことについては、遺構の項で述べることにする。

・また、B-Mは、B-M1～B-M3を設定したその位置および標高については、（第3図）に示したとおりである。なお、B-M2は、B地区、D地区の供用とした。

[第2図] 基本層序



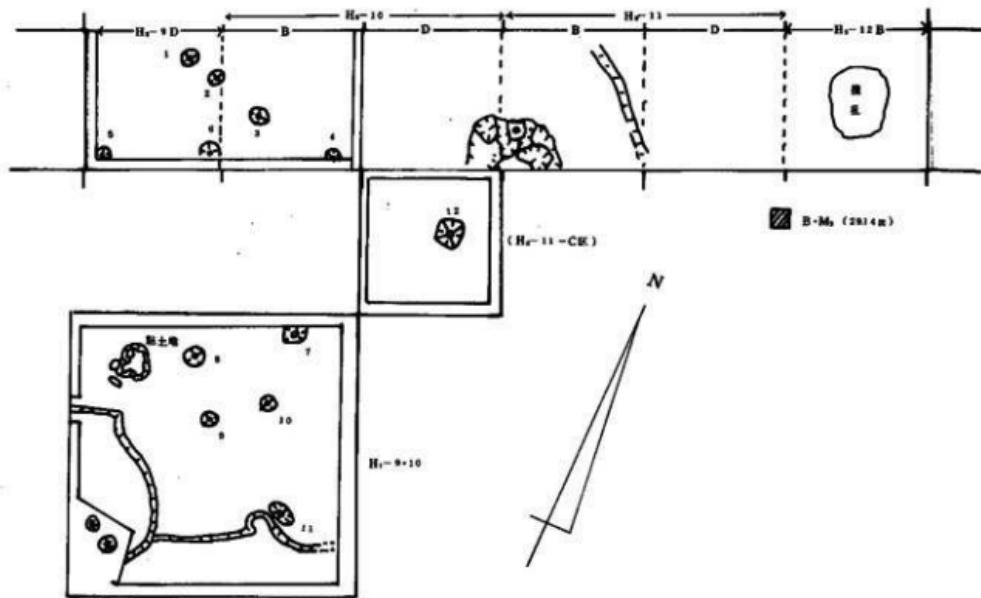
[第3図] 発掘地点とグリッド配置図



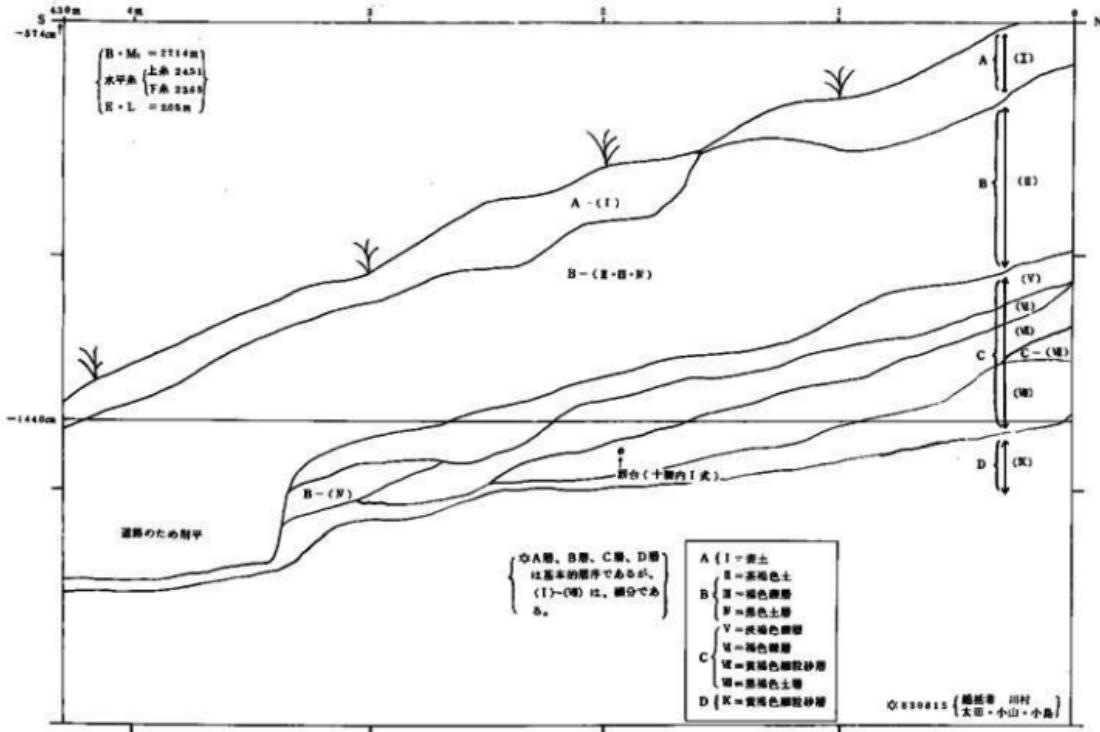
〔第4図〕〔C地区平面図〕(一部遺構出土図)

$8 = \frac{1}{20}$

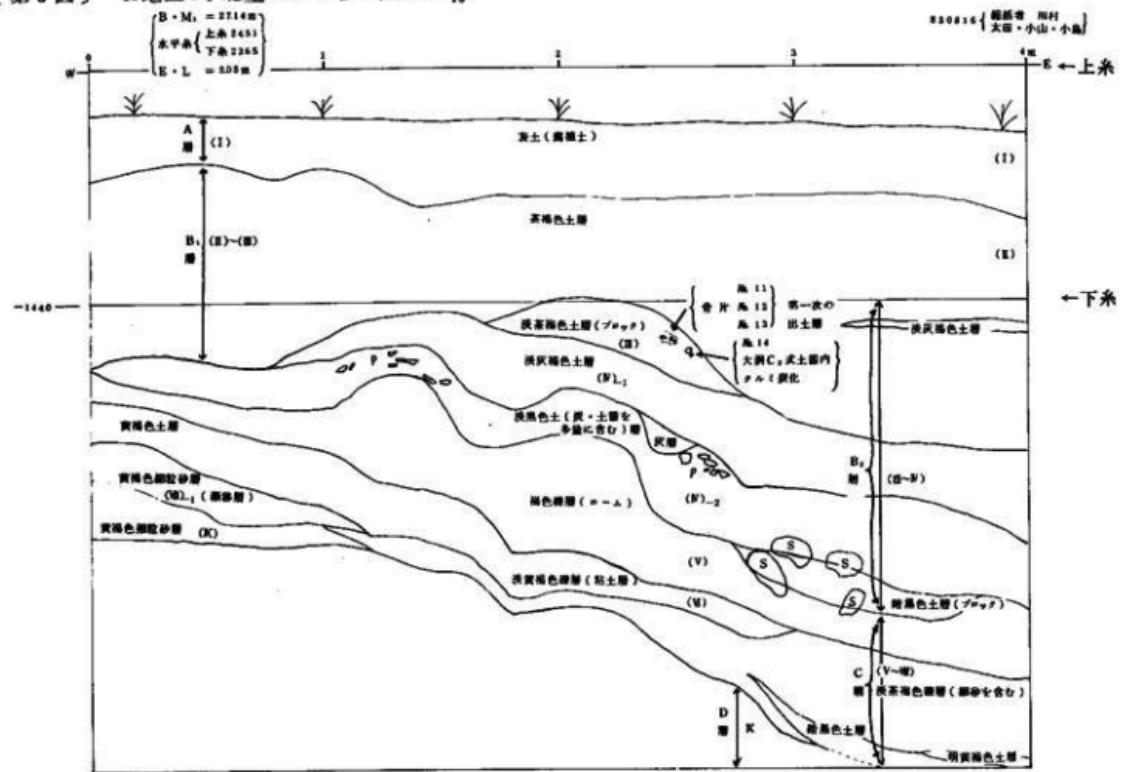
830817 太田・小島



[第5図] { A地区F,西壁セクション図 } (S= $\frac{1}{10}$)

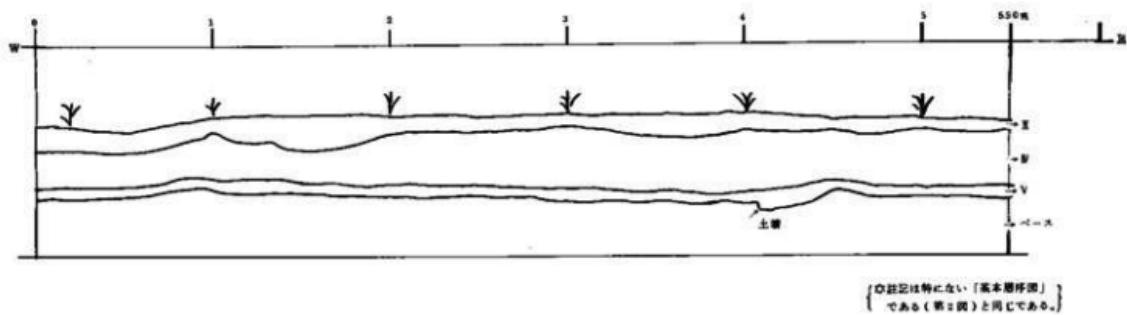


[第6図] A地区F₃北壁セクション図 ($S = \frac{1}{10}$)



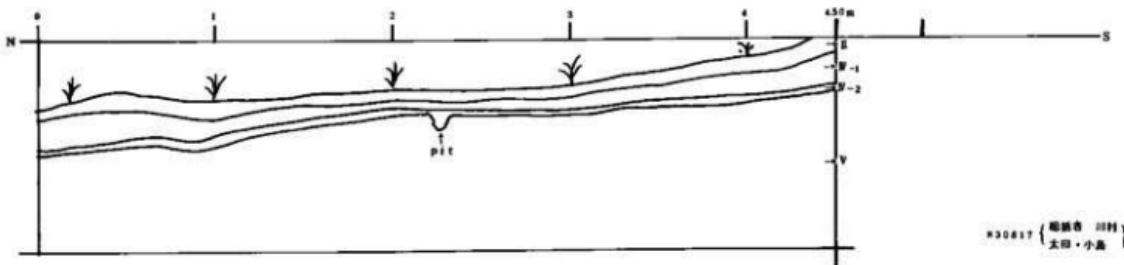
(第7図) [B地区北壁セクション図] ($S-\frac{1}{20}$)

• H.M. $\approx 2974\text{m}$
 { E.L. $\approx 1100\text{m}$ }
 • 水平基準レベル 1237m



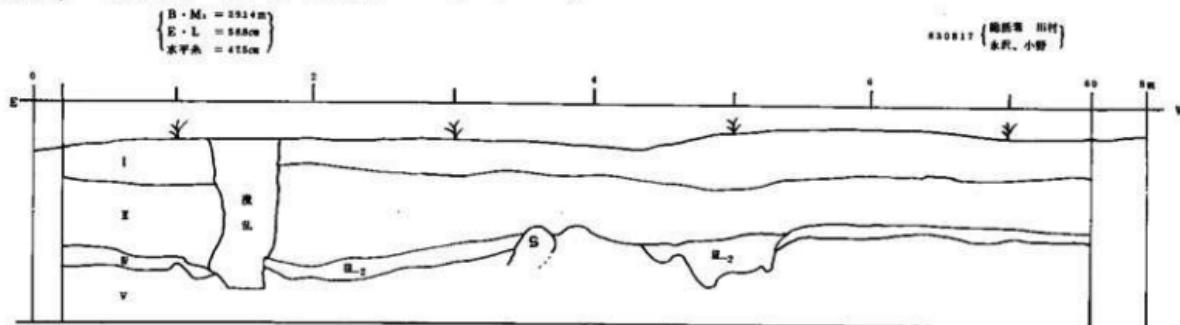
○註記は特にない「基本層序図」
である(第2図)と同じである。

(第8図) [B地区東壁セクション図] ($S-\frac{1}{20}$)

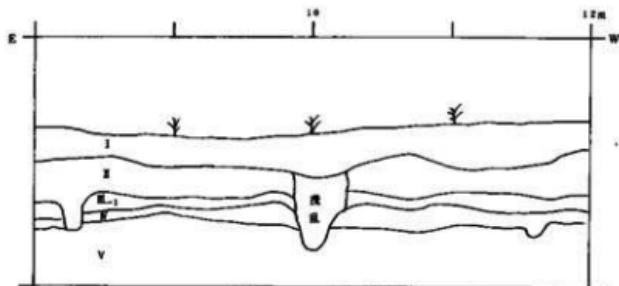


830817 { 記載者: 田村
太田・小島 }

[第9図] C地区 H₁-12・11・10南壁セクション図 ($S=\frac{1}{20}$)



1
22
1



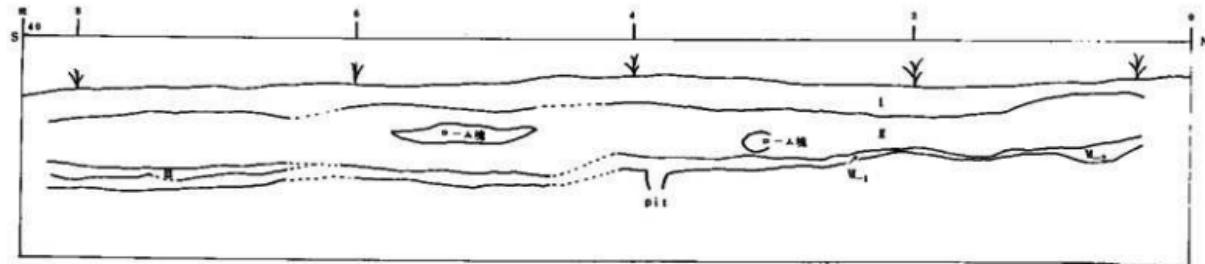
〈注 E〉

- I = 黒褐色土、草木根多量混入層上。
- II = 黑褐色土、粒子細かく、さらさらしており、1~2mmの砂粒混入層気な L₁
- III = 黑褐色土、粘土混入、少量の砂粒混入。顆粒あり。
- IV = 黒褐色土、粘土段(1~5cm大)混入。もろく崩りがない。やや硬性あり。
- V = ハム層。

(第10図) C地区 H_i-10~H_r-10 (H_r-10) 西壁セクション図 (S=1/20)

{
 H + M₁ = 231.4m
 E + L = 435m
 水平赤L = 554m

830817 (黒崎、田村)
水沢、小野



（注）

* B-A塊 = 粘土質で、粘性質とともに強い。一箇所褐色土。
その他は、西壁セクション（第11図）と同じ。

[II] 地形・層序

1 地 形

本遺跡の分布する五所川原市松野木地区は、市の中心より東方約 5 km、松野木川が県道福山・五所川原線を横切る周辺に位置する。

松野木地区周辺の地形を大区分してみると、東方から西方へ向って、中山山脈の南端を占める梵珠山地（標高 500 m ~ 300 m）、それに続く大沢迦丘陵（標高 200 m ~ 100 m）、前田野目台地（標高 70 m ~ 30 m）、および津軽平野の四つに区分できる。

松野木地区は前田野目台地上に位置しており、北は天神川、南は松野木川によって挟まれた部分を占める。

前田野目台地は海成段丘で、津軽平野の南東縁に原子、野里、松野木、飯詰と連続して分布しており、この台地を梵珠山地に源をもつ小河川が浸食によって谷をつくり寸断している。こうした開析谷には境ノ沢溜池、長橋溜池など多くの溜池がつくられている。

前田野目台地は面高度により、3面に細区分できる。即ち、標高 50 m ~ 70 m のⅠ面、30 m ~ 40 m のⅡ面、20 m ~ 30 m のⅢ面の3面である。松野木地区はこのうちⅡ面上にある。

遺跡は松野木地区台地の南西端部分にある。この台地はその北側を流れる松野木川の浸食によって舌状台地となっており、標高は 25 m ~ 30 m を示しⅡ面に連続している。

遺跡の南方一帯は、小規模ながら松野木川およびその支流の形成した扇状地となっている。

なお、遺跡の北側約 0.3 km 付近を西流する松野木川は津軽平野を北流して十川と合流するが、一部は境ノ沢溜池に注いでいる。

2 地質および層序

本遺跡の基本層序は第 2 図に示すとおりである。

遺跡のベースをなすのは V 層のローム層で、遺物包含層はⅡ層～Ⅳ層である。V 層以深Ⅱ層までは段丘の構成層で遺物の出土と直接関係ないが、遺跡内で発見された歴史時代のものと考えられる空掘の構造との関係からとくに記載した。な

お、この段丘の基盤をなすのはⅢ層の漿灰質細粒砂層である。

以下に各層の特徴をのべる。

I層 黒褐色を呈しており、草木根多数混入する腐植土で表土を形成する。

II層 黒色土で粒子が細かくさらさらしており、直徑1mm程度の粗砂を混入する。

III層 黒色土に粘土が混入したもので、細砂を含み粘性がある。暗黄褐色を呈す。

IV層 ロームから黒土への漸移層で粘性が強く、暗黄褐色を示す。

V層 粘性のつよい黒褐色均質ロームで、まれに石英粒がみられる。

VI層 黄褐色で粘性の強い粘土である。

VII層 粘土、砂および直徑数cm程度の主に亜角礫からなる礫層で、段丘礫である。

VIII層 漿灰質細砂まじりの粘土で、下層数センチはオレンジ色を呈す。

IX層 遺跡をのせる段丘の基盤をなす層で、黄褐色漿灰質細粒砂層である。

[III] 出土遺構(第3・第11・12・13図)

(1) 今回の発掘調査において検出された遺構は、

A地区においては、(G₁)において、柱穴状pit[†]、および(G₁)において擾乱のある径約70cm、深さ約60cmの貯蔵穴とも思われるピットを検出した。

この(G₁)南端近くの小ピットは、一部擾乱を受けており、プランは、ほぼ円形と認められるが擾乱のため、残念ながら正確は期し難いものであった。

柱穴状pit[†]、および貯蔵穴とも、基本層序の項〔Ⅰ〕で述べた(B層—Ⅳ層)上面で検出確認したもので、(G₁)では、「大同C₂式土器」のみが出土していることから、縄文時代晩期(大同C₂式)の遺構と認められる。

(2) B地区においては、つぎの遺構を検出した。それを下記に列記する。

Ⓐ、小土壘→このものは、未だ完掘していないので全体プランは明確でないものであるが、5~6角形のプランを持つものようである。(第11図、第3図)

この小土壘は、高さ約30~25cm、幅約30~40cmで、貼付粘土によって造られているものである。検出層位は、(B層—Ⅱ下)であって(B層—Ⅳ上)に設置されたものである。いまのところ歴史時代の構築物と考えられるが、未完掘であるため次回に結論を導き出したいと考える。

Ⓑまた、このB地区では、さらに土壤群を検出した。土壤群は、b地区の(B層—Ⅳ下)で検出したものである。発見した順に番号を付した。その土壤を列記すると下記のとおりである。

〔 土壤群 〕(第11図)

- 土壤 1 → 後期の土器片出土、P・P・L11-118(十腰内 I 式)
- 土壤 2 → (同上) P・P・L12-121(" ")
- 土壤 3 → 後期の土器片出土、P・P・L12-124、P・P・L13-138
(十腰内 I 式)
- N_o1 ◦ 土壤 4 → (同上) P・P・L13-136、P・P・L17-173
(十腰内 I 式)
- 土壤 5 → (") P・P・L13-142(" ")
- N_o2 ◦ 土壤 6 → (") P・P・L14-145(" ")

○土壤7→晩期の土器片出土、P・P・L16-107、108

(大洞A式)

○土壤8→後期の土器片出土、P・P・L14-154(十腰内I式)

No.5○土壤9→(同上) P・P・L14-152(" ")

以上のように、土壤群を検出したのであるが、土壤1～土壤9は、すべて、V層を掘り込んで、その上面全体に貼り付け粘土を貼ったものと認められる。

貼り付け粘土の厚さは、土壤を切っていないので不明である。完掘した後に精査したいと考えている。

また、各土壤の時期については、土壤上面、あるいは、土壤に密着した土器の型式によって、上記のように捉えた。

とくに、土壤4は、確実に密着土器があったので「十腰内I式」期であるが、他は、歴史時代の遺構もあることから確実であるとは、断定しがたい点も残る。

また、(IV)出土遺物-(3)に述べてある、歯骨片、鳥骨片の出土もあり、その出土地点については、(第11図)に示したとおりで、いずれも(V層)上面に貼付した貼り付け粘土上面であった。

なお、土壤4・6・9では、骨片は、土壤内および、その斜面に密着して出土した。(註・No.1・No.2・No.9)の骨片がそれである。

他の骨片は、図示したとおりである。(但し、No.11・12・13の骨片、および、No.14のクルミ炭化物は、第一次調査のものであるが、出土層(第6図)のセクションに投影したものである。

・〔柱穴群〕(第11図)

このB地区では、柱穴状pit1～16、A₁～A₃とした19このpitを検出した。このうち、深さ、pit底面の形状から1～16は縄文時代A₁～A₃の3こは、底面が弧状に内彎することから歴史時代のものと判定した。1～16については、後期・晩期の識別はむずかしいので区分できなかった。

また、A₁～A₃のpitは、時期不明である。完掘後さらに検討したいと考える。

(3) C地区においては、つぎに述べる各遺構を検出した。(第4・12・13図)

④燒土遺構→このものは、C地区的(H₁—11、～H₁—10区)のB・D小区分南壁において、(V層)上面で検出したものである。(第12図)に示すとおり、

この焼土遺構は、複雑な形態をしており、しかも起伏が烈しい。色調は赤褐色を呈し、きわめて堅緻なものである。一応、破壊されたカマド跡とも考えられるものであるが未完結のため断定は控える。

⑤壁面状遺構→このものは、(H,-11区)のB小区で検出したものである。(第4図)。

このものは、(第4図)に示すとおり、B小区の北西より南東に向ってトレーニングを横切って出土した。このものは(V層)を掘り込んだ床面から約15~20cmの壁高をもっているが、住居址の壁面であるかどうかは、目下のところ断定しがたい。

⑥柱穴状pit群→この遺構は、(H,-10区)のB小区、および(H,-9区)のD小区、(H,-11区)のC小区、および(H,-9+10区)において、1~12の順序で検出したものである。

このうち、1~4は、ほぼ直線的に並んでおり、(7+12)は歴史時代のものと判定した。

さきに述べた焼土遺構、および、壁面状遺構との相関関係等は不明である。

⑦粘土堆・壁面状遺構→⑥で述べたpit群の他に、(H,-9+10区)において、粘土堆(第13図)を、また、(第4図)に示すように壁面状遺構を検出した。いずれも、(V層)の上面で検出したものである。

・〔粘土堆〕→(第4+13図)

粘土堆については、(第13図)に示したように、サブトレーニングの中、および、その上面より土器片が出土した。

この土器片は、後期「十腰内I式土器」、および、「大同A式」の土器も含まれており、後世、すなわち歴史時代の構築物と考えられる。

・〔壁面状遺構〕→(第4図+12図)

この遺構は、(V層)下端で検出した。(V層)を15~25cm掘り込んだ壁面を呈しているものである。壁面下の床面を追求する過程で、pit→(7+8+9+10)を検出したものである。(第4図)に示すように未だ完掘していないので、住居址であるかどうかは断定を控える。

しかし、(C地区)全体をとおして考えた場合、pit群、壁面状遺構、焼土遺構等を総合して考えると、やはり住居址の可能性はきわめて高いようと思われる。このC地区では、A層・B層とも、後期・晩期の土器が混在して出土している。

のことから歴史時代における擾乱があったとみるのが妥当であろう。

また、このC地区からは、須恵器・土師器、珠洲焼の出土がある。土師器は、「桜井第二型式」であるので、さきに述べた歴史時代とは、平安時代中頃と考えよいように思う。

(4)D地区は、表面観察で既に空掘状遺構の存在を確認していたのである。

この空掘状遺構に(第3図)のように横にした十字形にトレンチを入れ(2m×12m)、堀の形状を確認することと、可能であればその構築年代を捉える意図で発掘した。

(第14図)は、その断面模式図である。堀の幅は、約1075m、その深さは、最深部で現在の表土より約2.9mを計った。以下本遺構の調査結果について報告する。

・(堀状遺構)

本遺跡の北東隅から西へゆるい弧状を呈した堀状遺構が約100mにわたって認められる。

本遺構についそは安東氏を亡ぼした南部氏が津軽統御のため北方警備として関所兼用の要塞を築き(神山館)鳴海左京亮を据えたという伝承があり、また貞亨4年(1684)の検地帳に観音堂地、山伏山学抱としてもその名が出てくるが、詳細は不明である。

今回発掘の際、盛土の中から土師器片が出土しており、構築の年代は前記伝承より古くなる可能性がある。

ここでは、今回把握できた位置、形態、地質について事実を記載するにとどめ、考察についてはもう少し資料が整ってから行う予定である。

1. 位 置

第3図上段に示すとおり、本遺跡の北端部にあり、ゆるい弧状を呈して北東隅から西南西方向へ延長し、その長さ約100mである。

2. 形 態

第14図に堀状遺構の模式的断面を示す。

この断面からわかるように、本遺構の特徴は底部の東西両側に幅1.2~1.3m、深さ0.2~0.3mの溝を通していることである。

以下に形態上の主な測定値を示す。

・遺構の幅(西側の掘り込み始めの幅) 10.75m

- ・遺構底部の幅（底部溝の最深部間の幅）2.2 m
- ・遺構最上面（上手面）から底部基盤面までの深さ 2.9 m
- ・内側の傾斜角 両側面とも 35°
- ・底部の溝

幅	西 側	1.2 m
	東 側	1.3 m
深 さ	西 側	0.3 m
	東 側	0.2 m
・堆積物の厚さ	底 部	0.75~0.9 m
	側面上部（両側とも）	0.35 m

3. 地 質

ローム層の下、基盤の凝灰質砂層に約1.8 m掘り込んでおり、前記のように底部には東西両側に溝を掘っている。

堀の両側で土手にあたる部分の土層（ローム層より上層の）は、堀を掘さくした残土で構成され、凝灰質砂、礫、粘土、ローム、黒土の混合されたものからなる。東側の土手では基盤の黄褐色砂層の影響をうけて黄色を帯びており、基盤の残土が多いことをうかがわせる。

堀の内部を埋積した堆積物は、大別して三層に分けられる。即ち、下層から一次黒色土（10cm）、土手からの礫、砂、ロームのブロックを含む流出層（40~50cm）二次黒色土（28~30cm）の三層である。なお、流出物層は西側で薄く、東側で厚くなっている。

・出土遺物は、堀の底面に炭化物が一面に広がっており、（第14図）に示すとおり、西端の土壘状盛り土（C層—V・Ⅵ・Ⅷ・Ⅹ層）が、擾乱状態で堆積されており、そのうち（V~Ⅹ層混合層）に、縄文時代後期「十輪内I式」土器・同無文土器（二次的に火を浴びている。）および須恵器小片が混入して出土している。

このことから、この須恵器片に前後する時期に構築されたものと考えてよいようと思われる。これらの出土土器片は、総計47片であったが、須恵器片は、わずか1片のみである。

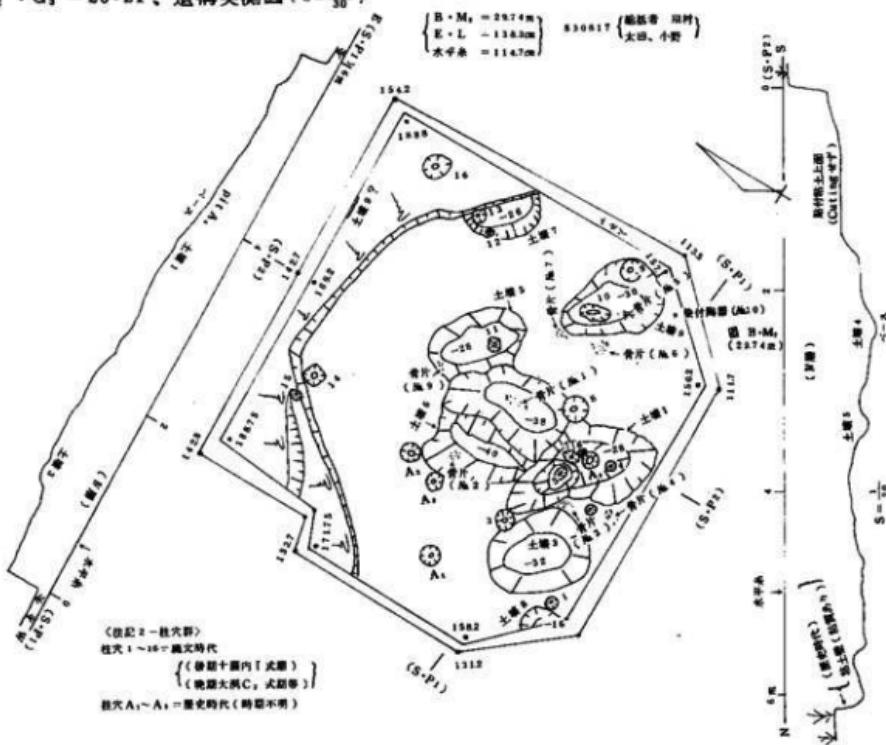
これらの土器片は、D地区出土、土器として、そのサンプルを、（P・P・L27・28）に掲げてある。

最も新しい年代の所産である須恵器片は、多分、長頸壺の破片と推定される。

このものは、前田野目・持子沢窯址と関係があるとすれば、鎌倉時代初頭まで下
がる可能性もあるが、筆者は、平安時代後半と想定している。次回の発掘を待つ
てさらに考えたい。

[第11図] B地区、G₁・G₂・G₃-20+21、遺構実測図 ($S = \frac{1}{30}$)

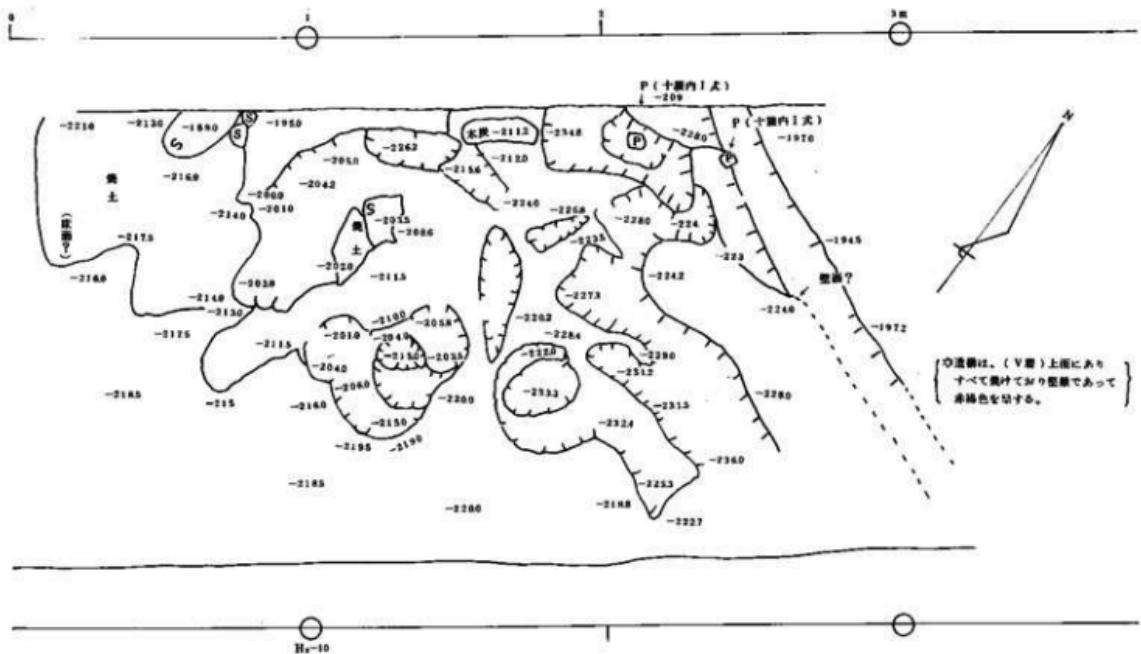
(地記1-土壤群)
 土壌1 十箇内1式
 □ 2 □ 1式
 □ 3 □ 1式
 □ 4 □ 1式
 □ 5 □ 1式
 □ 6 □ 1式
 □ 7 大湖A式
 □ 8 不明(十箇内1式)?
 □ 9 不明(十箇内1式)?



〔第12図〕 C地区、Hr-10(B+C)区遺構実測図 ($S=\frac{1}{10}$)

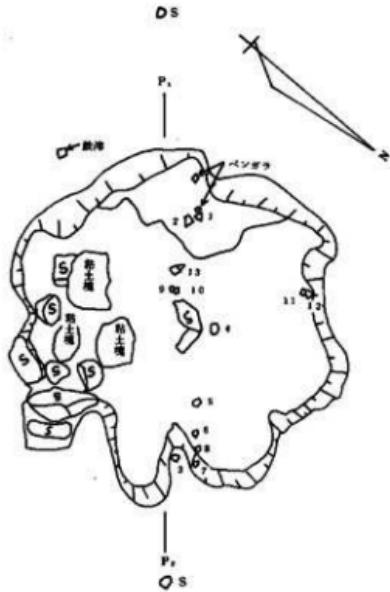
$B+M_1 = 2914\text{m}$
 $E+L = 485\text{cm}$

830817 { 錦糸町
木村、小野 }



[第13図] C地区 Hr-9 粘堆実測図 ($s = \frac{1}{10}$)

— 1 —



〔住居〕	
1. 大洞A式土器片(矢羽根状文).....	(大洞A式)
2. 武藏文土器片(縄文なし).....	(十箇内I式)
3. 鹿文口縁部土器片.....	(")
4. 口縁部土器片.....	(")
5. 細頭繩文土器片(斜行・横走繩文).....	(十箇内B・C?)
6. 中縫繩文.....	(縄文中期)
7. 縄文土器片.....	(十箇内I式)
8. 十箇内I式土器片.....	(")
9. 十箇内I式土器片.....	(")
10. 上縫部片.....	(第二板式)
11. 縄文土器片(武藏文のみ).....	(十箇内I式)
12. 十箇内I式土器片.....	(")
13. タ プ.....	(")

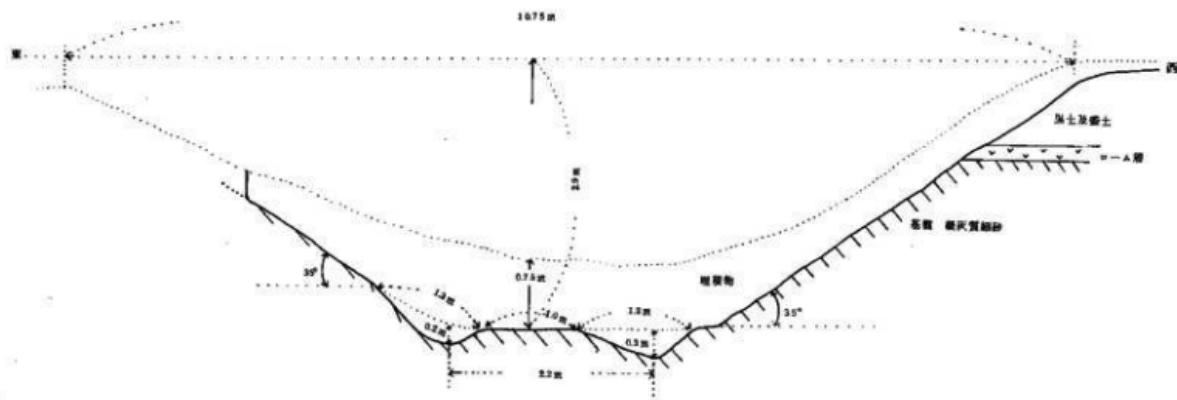
京この粘土塊は、P層下で確認する。また、P層上部に
貼り付け粘土の可能性あり。

235812 { 謙原者 田村
小野、太田 }



〔住居〕	
・表層	黒色土
・Ⅰ層	ローム混入層 (1~2cm)
・Ⅱ層	ローム層。しまりがあり硬い。
・Ⅲ層	黒色。ローム小粒を含む。木炭混入。しまりあり。
・Ⅳ層	ベース。暗褐色。堅性ややあり。(粘付粘土?)
・V層	ローム層

〔第14図〕 堀状遺構の模式的断面 $\frac{1}{50}$



昭和58年度 桶文時代編年表（含観音林遺跡第一・二次）〔表1〕
 (作成者 新谷)

推定年代	区分	土器型式	観音林遺跡 (第一次)	観音林遺跡 (第二次)	主要遺跡	
前 13.000	(草創期) 早期	(省略)			鰐ヶ沢町 嘴戸遺跡	
6.000	前期	式 a・b・c・d ₁ ・d ₂		(円筒下層式) ○	五所川原市 原子A遺跡	
5.000	中期	式 a・b・c・d ₁ ・d ₂ ・e		(円筒上層) b式	金木町 妻の神遺跡	
4.000	後期	(十腹内)式 I・II・III・IV・V	(十腹内) I式	(十腹内) I・II・V式	五所川原市 原子B遺跡	
3.000	晩 期	(大洞) B式	(大洞)	(大洞)	小泊村 ?	
		B・C式		(〃) B・C式	板柳町 土井I号遺跡	
		C ₁ 式	(大洞) C ₁ 式	(〃) C ₁ 式	五所川原市 観音林遺跡	
		C ₂ 式	(〃) C ₂ 式	(〃) C ₂ 式	五所川原市 観音林遺跡	
		(C ₂ -A式) A式	(〃) A式	(〃) A式	市浦村 七とめやち 五月女池遺跡	
		A'式			弘前市 砂沢遺跡	
2.000	弥生時代					
B-C 300		前期・中期・後期			五所川原市 山道溜池遺跡	
A-D 300	土器須恵器 使用の時代	第一型式		・土器第二型式		
1.200		第二型式		・須恵器	五所川原市 持子沢遺跡	
1.603	江戸時代	陶器		・染付陶片	市浦村 琴湖街遺跡	
		その他			五所川原市 観音林遺跡	
備考						
1. 主要遺跡は、五所川原市付近のものに限定した。 2. 推定年代は、正確を期したい。 3. ○印は、型式不明のものである。						

[IV] 出土遺物について

(1) 土器・土製品 (P・P・L No 1 ~ No 33)

出土した土器・土製品は、 $60\text{ cm} \times 28\text{ cm} \times 15\text{ cm}$ の箱で、19箱分出土した。その出土量の内訳は、つぎのとおりである。

章 A 地区 → 6 箱、B 地区 → 2 箱、C 地区 → 11 箱、D 地区 → 47 片

- 他に石器・石製品・原石が 1 箱の量であって、総出土量が計20箱であった。
・出土した土器・土製品は、既述したとおり C 地区において最も多く、A 地区、B 地区、がそれにつぐ量で、D 地区は、わずかに破片が47片であった。
・出土した土器類を、土器型式ごとに分類し編年表に整理して掲げると、〔表1〕のようになる。

なお〔表1〕縄文時代編年表（含観音林遺跡、第一、二次）には、昭和48年に発掘調査した際出土した土器類の編年表もあわせて、記してある。第一次と第二次発掘調査の結果について比較対象されたい。

・出土した土器・土製品の編年表を一覧すると理解されるとおり、今回の発掘調査で出土した土器類は、縄文時代、歴史時代にわたっており、当遺跡は、永年にわたる複合遺跡であることが判明した。

第一次発掘調査（昭48）においては、わずか $5\text{ m} \times 5\text{ m}$ のグリット一つの試掘調査であったので、「大洞C₂式土器」を中心とする単独遺跡としたが、今回の調査の結果、上記のように複合遺跡と訂正しておきたいと思う。

・〔表1〕編年表に示すとおり、出土土器類の上限は、破片のため型式名の決定は不能であったが、縄文時代前期、すなわち「円筒下層式土器」の他、江戸時代初期に位置づけられる「染付陶器片」の出土もあった。

以下各地区ごとに、土器類等の出土状況について概観してみることにする。

章 A 地区 → 既述したように、この A 地区より出土した土器類は、総量 6 箱の出土量である。

そのうち、約60%は、縄文時代晚期の土器群で、約40%が縄文時代後期初頭、「十腰内 I 式土器群」である。

出土層位は、原則的には（第2図・第5・6図）に示した、（A層・B層）であるが、このうち、（B層→Ⅲ層）が縄文晩期の主包含層であり、同じく（B層→Ⅳ層）が縄文時代後期の主包含層である。（第2図基本層序）

しかし、（第5・第6図）に示す、グリット（F₁）の北壁・西壁セクション図が示すとおり、地層は斜面（約23度の傾斜）であり、かつ、歴史時代における北部台地上部の削平の影響もあって層序は複雑であった。それ故、基本的には、（B層→Ⅲ層）晩期・（B層→Ⅳ層）後期と理解してほしい。また、（第2図）に示した（B層→V層）は、ローム層であり、ベース（地山）と考えてよいと思う。（但し縄文時代という意味におけるベースである。）

☆註・以下層位について、（B層→Ⅲ層）等を、（B→Ⅲ）と略記する。

章B地区→B地区において出土した土器類は、既述の箱で約2箱分である。土器類の出土量としては、最も少量であった。

出土した土器は、縄文時代後期のものが、約60%、晩期のものが約40%となつておらず、A地区とは反対になる%を示している。

このB地区においては、歴史時代の小土塁を検出したほか（第11図）、江戸初期に比定される染付陶片1片、土壙群を、それぞれ（B→Ⅳ層）下位において検出し（但し染付陶片はB→Ⅱ層）たほか、貼り付け粘土を発掘面全面に認めた。（土壙群については、〔II〕→参照）

・出土した土器群については、後述してあるので、省略するが、縄文時代後期初頭「十腰内I式土器」および同晩期「大洞C₂式土器」が主流をなしており、その他の型式のものが若干出土した。その詳細については後述する。

章C地区→このC地区においては、土器・土製品の出土量は、既述したとおり、最も多く11箱の量である。

・出土した土器は、縄文時代後期初頭「十腰内I式土器」と同晩期「大洞C₂式土器」それに、その他の土器が若干出土した。

この後期・晩期の土器の出土量の比率は、約30%対70%で晩期の土器が多く出土した。

これらの土器群は、（第7・8図）に示すセクション図（地層断面図）の（A→I、B→II・IV）層に混在して出土したものである。

すなわち、この C 地区においても、さきに述べたように歴史時代において地層が削平または、整地のため移動したものと考えるのが正しいようだ。（但し V 層は正常である。）

したがって出土した土器群は、層位的な把握は不可能であったのである。そのため、型式学的分類手法で整理したものである。

この C 地区で出土した、その他の土器のうち、注目すべきは、珠洲焼の出土である。須恵器と共に（B—IV 層）に、後期・晚期の土器と混在して出土した。このことは、考察の項で再び述べたいと思う。

△D 地区→D 地区より出土した土器類は、総数で 47 片であった。そのうちわけは、須恵器片 1 片、他は縄文式土器、土師器片である。縄文土器は、「十腰内 I 式土器」が中心で、空堀状遺構の両端揚げ土（盛土）内のローム層（第 V 層）中より出土した。また土師器片は、小片を含め 8 片で、桜井第二型式のものと認められる。また、須恵器片 1 片も上記のものと同一層出土で、第二型式の土師器に伴う時期のものと推定される。

この D 地区としたものは、研究目的として、空堀の性格解明を目指したものであった。そのことについては、〔II〕を参照されたい。

以上、A～D 地区より出土した土器・および、土師器類についてその概略にふれてきたが、念のため、土器・土師器類の出土層について、再掲することにする。

△A 地区→主包含層、晚期 = B 層 → 第 I 層
(A 層 - I + B 層 - II 、 IV 層にも混入あり)

A 地区→主包含層 後期 = B 層 → 第 IV 層
(C 層 - V ~ VII 層にも擾乱のため混入あり。)

△B 地区→主包含層 晚期 = B 層 → 第 IV 層
" 後期 = B 層 → 第 IV 層

(いずれも B 層 - IV 層で、歴史時代における擾乱と思われる)

章C地区→主包含層 晩期=A層-I、B層-II・III・IV層

後期=晩期と同様

(すなわち、A層・B層のI～IV層に混在する。歴史時代に削平または、擾乱されたものと認められる。)

☆なお、各地区出土の土器類については、P・P・L 1～33に概略の解説を述べてあるので省略したい。

〔観音林遺跡出土 石器・石製品一覧表〕

(表2)-61

種別	類別	P・L番	台帳 No.	S-P-L No.	計測値 (長×幅×厚) cm	重量 (g)	石質	出土区・層
石 鋸	1	P-L18	24	1	3.5×0.96×0.56	3	珪質頁岩	C-H ₃ -10-II
			46	2	3.58×1.52×0.68	9	めのう	C-H ₂ -10-I
			47	3	3.57×1.5×0.76	10	珪質頁岩	C-H ₂ -10-III
			53	4	3.09×1.28×0.52	1.5	〃	C-H ₂ -10-II
			55	5	6.5×1.5×1.0	1	めのう	C-H ₂ -10-II
			74	6	1.58×1.5×0.3	8	珪質頁岩	B-G ₃ -20-III
			113	7	3.6×1.35×0.32	2	〃	C-H ₂ -10-III
			131	8	3.12×1.2×0.57	3	〃	C-H ₃ -9-III
			135	9	2.65×1.4×0.4	3	〃	A-F-3-II
			94	10	3.02×1.42×0.5	2	〃	C-H ₃ -10-II
			111	11	4.15×1.0×0.7	2	〃	B-G ₃ -20-II
石 錐	1	P-L18	12	1	3.9×0.7×0.68	4	〃	C-H ₂ -11-III
石 鋸	1	P-L18	25	13	3.0×1.57×0.62	8	めのう	C-H ₁ -9-III
			101	△14	3.57×1.61×0.96	2	珪質頁岩	C-H ₃ -11-II
			131	△15	2.88×1.25×0.54	2	〃	C-H ₂ -10-II
削 器 (横形)	2	P-L18	120	16	4.95×5.5×1.2	20	珪質頁岩	C-H ₂ -9-II
			10	17	7.0×4.3×1.0	14	〃	C-H ₂ -11-II
			36	18	△5.4×5.4×0.9	30	〃	C-H ₂ -10-III
			119	19	4.35×3.25×0.98	10	〃	B-G ₃ -20-II
			116	20	7.0×3.2×1.0	20	〃	B-G ₃ -20-II
			117	21	6.35×2.82×1.1	12	〃	C-H ₁ -9-II
			142	22	6.3×3.67×1.0	30	〃	C-H ₂ -11-II
			13-2	23	5.68×2.65×1.85	20	〃	C-H ₃ -10-III
			92	24	3.92×4.38×0.80	12	〃	B-G ₂ -20-II

△=欠損品の現存品である。

〔表2〕-No.2

削器	3		25	3.2×3.89×1.22	10	珪質頁岩	B-G ₁ -21-II
			26	4.95×4.33×1.15	20	"	C-H ₁ -9-II
			27	7.82×3.96×1.22	30	ホレンフェルス	C-H ₂ -10-II
		35	28	△△△ 3.7×4.95×1.52	28	"	A-F ₁ -3-
		98	29	6.12×2.85×0.9	12	珪質頁岩	C-H ₁ -9-II
		87	30	5.12×2.88×0.9	20	"	C-H ₂ -9-III
			31	3.18×1.96×0.62	2	"	C-H ₂ -12-II
		27	32	3.8×2.16×0.85	10	めのう	C-H ₂ -10-II
			79	5.3×2.2×0.94	12	珪質頁岩	C-H ₂ -12-III
搔器	4		26	5.2×3.5×1.05	20	"	B-G ₂ -20-II
		5	35	4.85×3.2×1.42	10	流紋岩	A-F ₂ -3-III
		21	36	5.2×3.6×1.10	20	珪質頁岩	C-H ₂ -10-III
			37	4.46×3.32×0.66	10	"	B-G ₂ -21-II
		13-2	38	5.99×2.9×1.3	20	"	C-H ₂ -10-III
		13-3	39	△ 3.69×3.15×1.16	15	"	C-H ₂ -10-III
		142	40	4.50×2.72×0.94	10	"	C-H ₂ -11-III
		82	41	△ 3.0×2.25×1.19	20	"	B-G ₂ -20-III
			42	4.46×2.92×1.08	10	"	C-H ₂ -11-III
黒曜石片	5		39	43 10.9×4.97×2.1	120	"	C-H ₁ -9-I
		12	44	16.5×3.65×2.95	118	"	A-F-3-N"
		11	45	3.9×2.1×1.4	10	黒曜石	C-H ₁ -10-II
		149	46	3.72×1.97×0.72	3	"	B-G ₂ -20-II
		72-2	47	5.12×3.28×1.70	20	"	B-G ₂ -20-II
石槍			126	48 3.0×2.31×1.28	10	"	C-H ₂ -10-III
			37	49 4.0×2.16×0.8	5	珪質頁岩	C-H ₂ -11-III
		105	50	3.45×2.08×0.9	4	"	C-H ₂ -10-II
			31	51 5.4×2.61×1.01	10	"	C-H ₁ -9-II

〔表2〕-系3

石 槌	6	86	52	5.87×2.3×0.92	15	珪質頁岩	C-H ₃ -9-Ⅲ
		221	53	6.37×2.92×1.48	20	〃	B-G ₂ -Ⅱ
		23	54	4.57×2.86×1.28	12	〃	A-G-1-Ⅳ
		38	55	4.32×1.12×7.0	4	ホレンフェルス	A-F-3-Ⅳ
		188	56	△ 2.28×2.47×0.7	2	珪質頁岩	C-H ₃ -10-Ⅱ
石 斧	7	75	57	11.9×4.9×2.6	240	ホレンフェルス	C-H ₃ -10-Ⅱ
		118	58	△ 11.9×4.8×2.4	292	〃	C-H ₃ -9-Ⅱ
		26	59	8.23×3.48×2.2	105	〃	C-H ₃ -9-Ⅱ
		130	60	5.75×3.43×1.31	38	〃 土焼内	B-G ₃ -20-Ⅱ
	8	128	61	△ 3.68×3.81×1.62	30	ひん岩	C-H ₃ -11-Ⅲ
		124	62	△ 5.05×3.6×2.3	60	〃	C-H ₃ -11-Ⅲ
		37	63	△ 4.55×3.6×1.6	46	ホレンフェルス	C-H ₃ -10-Ⅲ上
		71	64	6.34×4.4×2.4	110	ひん岩	B-G ₂ -20-Ⅱ
		96	65	△ 3.9×4.59×2.4	50	〃	C-H ₃ -10-Ⅲ
		3	66	6.87×3.85×2.4	55	流紋岩	A-F-3-⑩
鉈 状 石 器	9	66	67	9.57×7.38×2.49	195	ホレンフェルス	C-H ₃ -10-Ⅲ
石斧状 石 器		3	68	11.9×7.5×1.82	200	流紋岩	B-G ₃ -20-Ⅱ
打欠き や磨痕 のある 扁平石 器	10	52	69	6.1×4.8×1.18	60	安山岩	A-F-3-⑩
		69	70	6.1×4.75×1.20	54	流紋岩	A-F-3-⑩
		89	71	6.45×4.10×1.36	60	安山岩	C-H ₃ -9-Ⅱ
石 錐	10	191	72	5.83×4.70×1.08	34	流紋岩	C-H ₃ -10-Ⅲ
打欠き や磨痕 のある 石 器	10	85	73	5.16×3.55×1.05	24	流紋岩	B-G ₃ -20-Ⅱ
		55	74	5.5×6.6×1.40	60	安山岩	A-F-3-Ⅱ
不定形 石 器	11	23	75	13.6×3.37×2.64	90	硬質頁岩	C-H ₃ -10-Ⅱ
		23	76	11.28×4.59×1.75	150	安山岩	C-H ₃ -10-Ⅱ
石 錐	11	23	77	8.65×4.72×2.07	90	流紋岩	C-H ₃ -10-Ⅱ
打欠きの ある石器	11	199	78	7.22×4.61×1.62	70	流紋岩	C-H ₃ -11-Ⅲ

〔表2〕- A-4

円盤状 石器	12	15	79	pitch 5.6×5.5×2.3	58	流紋岩	A-F-3-⑩
		77	80	5.9×5.7×2.12	80	"	C-H ₃ -9-II
		84	81	5.46×4.81×2.12	70	"	B-G ₃ -20-II
		29	82	5.6×5.49×2.1	85	"	C-H ₁ -9-N
		133	83	4.9×5.96×1.16	28	"	C-H ₃ -9-N
原石	12	33	84	1.55×1.35×0.85	10	ひすい	B-H ₃ -9-II
		78	85	1.7×1.1×1.0	10	"	C-H ₃ -10-III
		186	86	1.23×0.76×0.53 2.71×2.22×1.56	1 8 その2(重ねたし)	"	C-H ₃ -10-II
梢円形 扁平石 器	13	14	87	7.1×5.9×2.6	130	流紋岩	A-F-3-⑩
		36	88	6.12×5.32×1.63	70	"	C-H ₃ -10-N
		37	89	5.62×4.78×1.77	50	"	C-H ₃ -11-II
		183	90	6.0×4.98×2.08	52	"	C-H ₃ -10-III
石錐	13	110	91	5.32×3.98×1.5	40	"	C-H ₃ -11-II
		137	92	6.1×0.88×1.2	40	"	C-H ₃ -10-III
方 扁 石 器	14	2	93	7.99×8.2×2.3	198	"	A-F-3-I
		68	94	4.92×4.08×1.27	35	"	C-H ₃ -11-II
		95	95	5.5×5.3×1.92	50	"	C-H ₃ -10-II
		122	96	4.8×4.32×1.20	30	"	A-F-3-⑩
		36	97	6.97×6.1×1.48	80	"	C-H ₃ -10-II
		4	98	5.3×5.4×1.9	70	硬質頁岩	B-G ₃ -20-II
穿孔石	15	16	99	8.1×5.18×2.5	100	流紋岩	C-H ₂ -10-II
異形 石器		123	100	6.0×7.83×1.56	90	"	A-F-3-⑩
三角形 石器		14	101	5.2×5.5×2.36	55	ひん岩	C-H ₃ -10-II
岩 偶 破 片		132	102	△△△ 6.4×6.9×4.86	40	流紋岩	B-G ₃ -20-II
岩 偶 アッブ	17	132	102	"	40	"	"
原石 (土器、 石器)	18	53	103	1.7×1.1×1.0	2	礫灰岩	C-H ₃ -10-III
		121	104	2.5×1.3×1.0	2	流紋岩	C-H ₃ -10-III

〔表2〕-A5

			28	105	13.3×7.32×4.9	390	流紋岩	C-H ₁ -9-II
クボミ石	19	100	106	△△△ 6.4×6.9×4.86	240	"	C-H ₁ -10-II	
		66	107	11.2×7.6×4.75	380	"	C-H ₁ -10-II	
		58	108	10.4×5.31×4.5	280	"	C-H ₁ -10-N	
		65	109	12.0×9.15×5.5	660	"	B-G ₃ -9-II	
		81	110	7.76×6.9×4.4	285	"	C-H ₁ -11-II	
タタキ石	20	9	111	9.5×7.2×5.25	370	"	C-H ₁ -11-II	
		45	112	10.5×6.38×5.52	390	"	A-F-3-④	
		104	113	8.81×6.08×4.10	145	頁岩	C-H ₁ -10-II	
タタキ石	20	56	114	9.7×7.28×3.38	390	花崗閃長岩	A-F-3-④	
クボミ石	20	19	115	13.5×11.1×4.92	660	流紋岩	C-H ₁ -10-N	
石錐	21	6	116	10.0×8.36×2.9	310	"	B-G ₃ -20-II	
		115	117	7.15×5.4×1.8	180	"	C-H ₁ -10-II	
		63	118	12.3×10.8×3.07	665	"	C-H ₁ -10-II	
穿孔石	21	67	119	△△△ 6.8×7.7×4.82	175	泥岩	C-H ₁ -10-II	
網用ウキ?	21	10	120	9.56×7.96×4.32	100	浮石	C-H ₁ -11-III	
羽口状石製品		101	121	7.5×3.65×5.72	150	泥岩	C-H ₁ -10-N	
不定形 細長クボミ石	22	59	122	13.6×8.2×4.47	398	流紋岩	C-H ₁ -10-III	
		43	123	13.8×6.0×2.3	320	"	A-F-3-III	
		44	124	14.6×6.65×5.57	490	"	A-F-3-N	
		41	125	13.3×5.96×5.98	549	"	B-G ₃ -20-II	
石皿 破片	23	62	126	△△△ 16.0×11.0×5.6	kg 129	安山岩	C-H ₂ -10-II	
		40	127	△△△ 13.1×6.96×4.2	440	緑色凝灰岩	C-H ₂ -10-III	
		114	128	△△△ 9.48×6.25×4.45あり	180	流紋岩	B-G ₃ -20-II	
		40	129	△△△ 6.93×5.9×2.35	180	"	C-H ₂ -10-II	
		40	130	12.58×8.75×3.48	650	"	C-H ₂ -10-II	
椎円形 扁平石器	24	93	131	9.18×9.77×2.67	340	"	B-G ₃ -20-表採	

〔表2〕-系6

楕円形 扁平石器		24	5	132	△ 6.6×10.1×2.48	230	流紋岩	B-G ₃ -20-II
大形 抉入石器			35	133	16.8×11.3×3.9	680	膜灰質泥岩	A-G-1-⑩
大形円盤 状石器			60	134	9.82×9.51×5.27	610	流紋岩	C-H ₁ -10-II
細長い 磨痕・ 打痕の ある石 器		25	52	135	12.76×7.0×4.47	510	〃	C-H ₁ -9-II
			64	136	16.0×5.8×3.25	340	〃	B-G ₁ -20-II
			103	137	△△△ 11.3×3.17×3.2	165	安山岩	B-G ₃ -10-II
			61	138	14.7×5.48×3.55	360	流紋岩	C-H ₁ -10-II
			53	139	14.1×4.7×3.46	355	花崗閃長岩	C-H ₁ -9-N
球形石器		26	109	140	5.65×5.3×3.7	220	ホルンフェルス	C-H ₃ -11-N
			110	141	5.4×4.75×5.35	180	めのう	C-H ₃ -10-II
大形未完 成石器		26	108	142	18.2×6.5×23.2	152	頁岩	C-H ₃ -11-III
半月形 石器			112	143	9.35×4.2×3.98	140	〃	A-F-3-II
石刀状石 器類火			103	144	△△△ 11.3×3.17×3.2	150	〃	C-H ₁ -10-II
円形 扁平石器		27	20	145	9.6×7.63×2.45	262	流紋岩	C-H ₃ -10-II
大形石棒 状石器			8	146	27.2×10.2×7.8	2,180	〃	A-F-3-VI
P+L21 P+L26 大形石棒 羽口状石 製品		28		142	142に同じ			
				121-b	121に同じ			
				121-a	全同			
角 碓		29	XX	147	3.65×3.68×3.5	65	鉄石英	C-H ₂ -11-II
円 碓			○	148	11.2×9.68×8.08	710	ひすい原石	A-F-3-⑪
小 塊			◎	149	5.5×4.8×4.0	80	鐵 淬	C-H ₁ -10-II
岩 面			X ₁	150	9.1×7.1×4.09	200	珪質細粒 凝灰岩	A-F-3-N

(2) 石器・石製品等 (S・P・L No 1 ~ No 29、表 2 ~ 表 1 ~ 表 7)

石器・および石製品については、(表 2 - 表 1 ~ 表 6)に計測値、重量、石質、出土区、および層位について記してあるとおりである。

また、S・P・L、No 1 ~ No 29 に概説してあるので、ここでは器種と岩質について簡単に述べることにする。

(a) 器種

○石錐	14点	○石錐	1点
○削器	17点	○搔器	10点
○石槍	9点	○石斧	12点
○鉈状石器	1点	○石斧状石器	1点
○石錐	7点	○円盤状石器	6点
○打欠きを磨痕 のある石器	6点	○梢円形扁平石器	5点
○穿孔石器	2点	○異形石器	1点
○三角形石器	1点	○岩偶	2点
○クボミ石	9点	○タタキ石	2点
○羽口状石製品	1点	○不定形細長クボミ石	4点
○石皿	5点	○大形抉入石器	1点
○細長磨痕打痕 のある石器	5点	○球形石器	2点
○半月形石器	1点	○石刀状石器	1点
○円形扁平石器	1点	○大形石棒状石器	1点
○ウキ	1点		
.....			
○黒曜石	4点	○角礫	1点
○ひすい原石	5点	○原石	2点
.....			
○鉄滓	1点	<u>$\Sigma = 150$ 点</u>	

以上のように、器種別にして、31器種に分類した。この中には、機能または用途上類似のものもあるように思われるが、形態的な形状に視点の中心をおき分類してみた。また他に、一部に細部加工のあるもの約30点識別したが割愛した。これらの石器類については、スペースの関係上、その概説は、省略させていただい

たので許容下さい。

なお、前項でも述べたように、これらの石器、石製品等は、出土土器の型式から考へて縄文時代後期・晚期の両期にわたるものであろう。また、ごく少數は、土師器、須恵器使用時代のもの（S・P・L21-121、S・P・L28-121）とも考えられる。

(b) 岩質について

つぎに、石器・石製品、その他について、その岩質を分類してみることにする。

①珪質頁岩	45	②めのう	5	③ホルンフェルス	9
④流紋岩	56	⑤黒耀石	4	⑥ひん岩	5
⑦安山岩	6	⑧硬質頁岩	2	⑨凝灰岩	1
⑩頁岩	4	⑪花崗閃綠岩	2	⑫緑色凝灰岩	1
⑬泥岩	2	⑭鉄石英	1	⑮珪質細粒凝灰岩	1
⑯凝灰質泥岩	1	⑰ひすい	5		

上記のように、珪質頁岩が30%、流紋岩が37%で最も多く、ホルンフェルスが6%、となっている。

器種別との相關関係をみると、珪質頁岩は、刃器、削器、搔器に多く、流紋岩は、その他の石器に多く用いられる。すなわち、縄文人は、岩質と器種を考えて道具を作成していたことが理解される。

項目 番	(五所川原市観音林遺跡(第一・二次)発掘調査骨片・既果類等鑑定結果一覧表) (鑑定者 日本大学講師 金子治昌による) (表3)
1 (B)	骨体部分のみの破片1、断片的な標本のために、種名・部位を確め難いが、おそらくシカの中手もしくは中足骨ではあるまい。
2 台89	小断片のため同定が出来ない。おそらくシカあるいはイノシシの骨か。
3 (J)	上に同じ
4 (I)	上に同じ
8/17 東拡区 5 (B)	頭蓋片ではないかと思われる。イノシシのものか。
6 (G)	小断片のため同定が出来ない。おそらくシカあるいはイノシシの骨か。
7 (BX)	上に同じ
8 台43	骨ではないと思われる。
9 (H)	石と小骨片がある。骨については同定できない。
10 染付 台90	染付破片 江戸中期
M×Gr-20-AB	(A) 骨ではないと思われる。
11 第焼 12 一土 13 次内 . .	1. ガンカモ科の上腕骨 おそらくガンの上腕骨、右近位端部 2. シカ科 ニホンジカの上腕骨左、遠位端部内側の破片 M13のシャーレの中にあるのも、この2の一部と思われる。
(植物遺物) 14 (一 次)	くるみの堅果
記 事	骨はすべて火を受けて焼かれており、断片的な骨が多かったが、小破のものでもおそらく獸類の骨片であったろう。もっとも大きい破片でM11～13中にあったシカの上腕骨で、これも破損が著しく、さらに取上げの際にこわれたものと思われる。 ガンカモ科の骨1片を得たことは注目される。これも破損が著しいが、からりじて同定できるものであった。冬季飛来したものであろう。 断片的な資料ではあるが、内陸部における動物遺体の出土例として注目されよう。

(3)骨類・堅果類・染付陶器片 (B・P・L1~3、表3)

1) 本遺跡の調査は、昭和48年度に第一次試掘調査を実施し、本年度の発掘調査は、本遺跡の本格的な発掘調査の第一歩であることは既に述べたところである。

第一次発掘調査は、グリットF₃ (第3図)に、5×5mの発掘区を設定し第Ⅲ層まで掘り下げるものである。

それ以下の層については、第一次調査では発掘を中止し、後の調査において掘り下げる計画であった。そのことについても既述のとおりである。

・この第一次試掘調査において、わずか25m²の範囲ではあったが完形、復原土器約60個体、石器完形品等約50ヶという成果であった。また、このグリットの第Ⅲ層において焼土層を検出、この焼土層より出土した骨類が、(B・P・L3-#11~#13)である。

・また、同じく、この焼土層より出土した大洞C₁式壺形土器内より検出した資料が、(B・P・L3-#14)である。(註・トチの炭化物もあった。)

以上のこと等については、既に「観音林遺跡」(1975.五所川原市教育委員会刊行)として報告してある。

この際出土した骨類・堅果類について、今回、金子浩昌氏に鑑定を依頼することができ、その御回答を得た結果を(表3)に報告する次第である。

・また、(B・P・L1~2-#1~#10)の骨片類は、今回の調査において、B地区の発掘面から出土したもので、(B層-IV下)に検出された土壤内および、その周辺から出土したものである。

これらの(#1~#14+#x)についての鑑定結果については、(表3)に示したとおりである。なお、このことについては、考察の項において再び述べることにしたい。

〔V〕 考 察

I) 遺跡について

- ・本遺跡は、既述のように昭和48年度に試掘調査を実施し、今回の調査は第二次発掘調査であった。

第一次調査では、本遺跡をⅠ号・Ⅱ号遺跡と考えて、Ⅰ号遺跡の一角（A地区 - F₃）に試掘溝を設定し発掘したのであるが今回の調査では、Ⅰ・Ⅱ号遺跡を、A・B・C地区として発掘調査したのである。

・その結果、第一次でⅠ号・Ⅱ号遺跡としたものは、同一性格を有する遺跡であることが出土土器より考察して判明した。すなわち、D地区とした空堀状遺構を含めて、縄文時代後期・同晩期、および歴史時代（平安時代）の遺物・遺構を有する複合遺跡と言うことができる。

II) 地形・層序等について

・本遺跡は、五所川原市大字松野木字花笠81番地にあって、標高25～30mの舌状台地となっている地形である。遺跡はその台地の西半分一帯にあり、全体地形を観察すると台地の上部は、歴史時代に整地されたものようである。

しかもこの台地の東側低地に堀を南より西北にめぐらしており、これは地形を巧みに利用した堀と考えられる。

また、北側はゆるい斜面をなすが、南側は階段状の地形で、文献的に館址とされているところである。

・層序を観察すると、A地区・B地区・C地区において、若干の相違は認められるが、〔第2図〕に示したように、この台地は、A層・B層・C層・D層の順に堆積したものと認められるが、（A地区F₃）では〔第5・6図〕に示すように、歴史時代・縄文晚期・同後期の三時期にわたって、台地上の削平による影響、晩期の遺構その他の搅乱等々が認められ、後期では、〔第2図—基本層序図〕の（第Ⅲ層）まで擾乱が認められる複雑さを呈している。

・また、（B地区）では、A層を欠き、B層の（Ⅲ層）も欠けている。このことは、（B地区）に歴史時代の土塁が存在し、土壤群の検出等遺構の所在から、削平と整地の影響があったことを物語っている。（第7・8図）

・C地区においては、セクション図、遺構の状態（第9・10・12・13図）のように、A層—I、B層Ⅱ～Ⅳが厚く、出土土器は、後期・晩期の縄文土器、土師器

須恵器、珠洲焼が混在して出土し、生活面は、縄文期・歴史時代とともに（第V層～ローム層）にあったことが柱穴状pitのあり方から考えられるところである。

・D地区としたものは空掘状遺構の解明を目的として設定した地区である。その層序については、（第14図）に示すとおりである。（模式図）

この堀状遺構の底部の形態に注目したい。すなわち、この底部の溝状断面を有する形態は、次年度の発掘でさらに考えたいので保留する。ここでは、（第Ⅳ層→第四紀層まで掘り込んでいたことの報告に止めたい。

II) 検出遺構について（第2・11・12・13・14図）

今回の発掘調査において検出した遺構を列記すれば下記のようになる。（再掲）

-
- A地区→柱穴状pit1、円形プラン貯蔵穴？1
 - B地区→柱穴状pit1～16、A₁～A₃、小土壘（5～6角形）、土壙1～9
 - C地区→カマド状焼土遺構、壁面状遺構、粘土堆、柱穴状pit1～12
 - D地区→堀状遺構
-

以上のように各地区において遺構の検出を見たのであるが、これらの遺構については、未だ未完掘であるので考察は省略し、次回の発掘調査で、特に柱穴群と遺構との関係、さらに、住居址の壁面状を呈する壁面状遺構の性格、生活面の確認等を追求していきたいものと考えている。

III) 出土土器・土製品について

出土した土器・土製品は、（P・P・L1～33、F・P・L1～8）に示してあるが、A・B・C・D地区とも、（表1→編年表）にあるとおり、その上限型式は、円筒下層式土器、下限型式は、大洞A式土器である。出土土器の主流をなすものは、縄文晚期大洞C₂式土器と、後期十腰内I式土器である。両者の比率は6：4になるようである。

土器そのものは、各期のノーマルなもので特に問題はない。出土層位は、既に述べたとおり、混在していたが、基本的には、（B層-II・III）が晚期の土器、（B層-IV）が後期の土器包含層である。

IV) 石器・石製品について

・石器・石製品については（表2）に、器種、計測値、岩質等一覧表に示したとおりであるが、ここでは、2点について考えてみたい。

一つは、遺跡全体にわたって、歴史時代に台地頂部は削平され整地されていること、または、攪乱等のため、晩期のもの、後期のものという厳密な意味での識別は困難であったことである。このことは、遺跡の性格に由因することであり、両者の区分を断念した。

・その前提に立って考察を加えてみた場合、一つは、円盤状石製品の出土が、きわめて多い事実である。このことは、筆者等が手がけた「五月女瀬遺跡」の例と比較すれば興味深いものがある。（五月女瀬遺跡は晩期である。）

すなわち、海岸または湖岸に立地する遺跡と、当遺跡のように台地上の遺跡の他に、後背地に山地がある遺跡、すなわち、生業の相違による石器組成の相違を暗示しているようである。「五月女瀬遺跡」は、十三湖に臨む遺跡で、その石器組成から海岸性の立地に依存する傾向が強く、円盤状石製品の出土はない。

それに対して、当遺跡は、上記のように円盤状石製品に円形、方形、梢円形の形態的変化もあり、その出土数も多い。このことは、生業の基盤の相違や、晩期・後期の時期差をも暗示している可能性があることを指摘しているかも知れない。このことは、今後の研究課題であろう。

・つぎに石器・石製品の岩質についてふれてみる。石器の岩質については、既述したとおり、珪質頁岩製約30%、流紋岩製37%となっており、当地方の遺跡としては、一般的傾向と認められる。

特筆すべきは、ひすい小碟4・同円碟大形が1点(S-P-L29)出土したことである。青森県では、ひすいの石製品の出土報告は、相当数知られているが、円碟塊の出土は少なく、原石の県内産出の可能性がないとすれば交流の問題を推定しなければならないのであろう。

四 骨片・堅果類・染付陶片について(B-P-L1~3、表3)

出土骨片・堅果類・染付陶片については、既に述べたように、日本大学講師金子浩昌氏の鑑定結果を(表3)に掲げてある。

すなわち、今回の調査において、B地区の土壤群に伴って、(表3-A1~9)の骨片、および、(表3-A10)の染付陶片が出土した。

またA地区においては、昭和48年の調査において、(表3-A11~13)の骨片および、大洞C₁式壺形土器内より、A14としたクルミ堅果炭化物が出土している。(第6図)

(※註、骨片-A11~13、クルミの堅果-A14は、今回の発掘におけるセクション

図一第6図に出土層位を投影してある。)

鑑定の労をとられた金子浩昌氏は、(表3)において、種別をつぎのように述べている。

1. シカ	2. イノシシ → B地区出土
3. ガン	4. シカ → A地区(S 48)

また、記事として、「骨はすべて焼けており、——中略——断片的な骨が多い。ガンカモ科の骨1点を得たことは注目される。——中略——冬季に飛来したものであろう。断片的な資料ではあるが、内陸部における動物遺体の出土例として注目されよう。」

以上のように述べられている。(表3)また、瓶14としたクルミの堅果は、壺形土器内に木灰をつめ、トチとクルミを入れ、土をつめて火にかけたもので、当地方におけるアケ抜き手法のルーツとも思われる。(なお、トチは筆者の鑑定であるので自信がない。)→表示せず。

また、染付破片は、江戸初期と鑑定されている。このものと遺構との関係等々は、未解決の問題であり、また、骨片類と土壤との関係もまた解明される必要があるが、次回の発掘において、さらに追求していきたいと考えている。

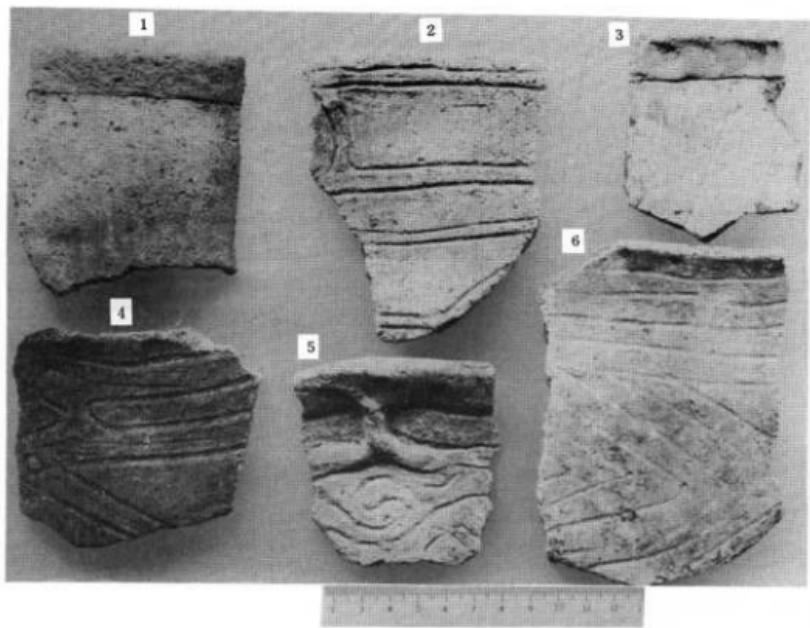
〔参考資料〕 狐野製鉄遺跡炉内出土鉄塊分析表(他との比較資料を含む)(表X)
・この分析表は、昭和53年に発掘調査した鉄塊の分析表で、日本考古学協会会員穴沢義功氏の好意によるものである。なお、分析資料は未掲なので、とりあえず、この(表X)のみを掲げて参考資料とする。

(新谷、川村記)

参考文献

- | | | |
|------|------------|-------------------|
| 1968 | 十腰内遺跡 | 今井富士雄・磯崎正彦 岩木山刊行会 |
| 1975 | 観音林遺跡(第一次) | 新谷 雄蔵 五所川原市教育委員会 |
| 1982 | 五月女瀬遺跡 | " 市浦村教育委員会 |
| 1983 | 亀ヶ岡式土器 | 村越 澄 ニュー・サイエンス社 |
| 1960 | 石器時代の日本 | 芹沢長介 築地書館 |
| 1975 | 縄文時代の漁業 | 渡辺 誠 雄山閣 |

〔A地区出土、土器〕(P・P・L1~3→後期) P・P・L1



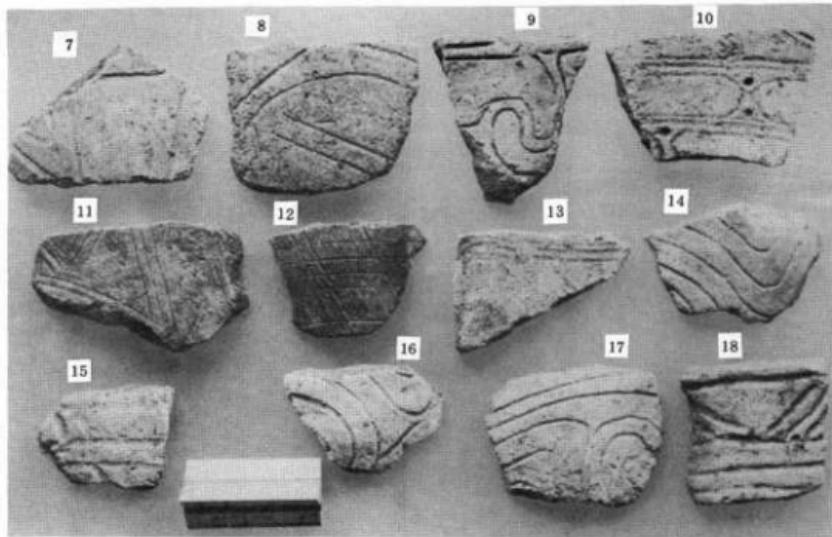
☆〔A地区出土、土器〕→P・P・L1

- ここに掲げた口縁部破片は、いずれも縄文時代後期初頭の「十腰内I式土器」である。
- (1・3)は、折り返えし口縁のもので、また(5)は、隆起線文を口縁下に有するものである。
- (2・4・6)は、沈線文のあるもので、(2)は2条の沈線文が2~3段に施文され、1段と2段目には縦位の2重弧線により連結し円形文となる。(4・6)は、平行する矢羽根状沈線文のあるタイプである。

☆十腰内I式土器の型式分類は、未だ不充分であると言われているが、その施文は、沈線文を主体とするもので、沈線文のあり方が、分類を困難にする程、自由性が認められる。これらのものは、A地区(B層-N層)出土である。(以下、下記のように表記する。)

☆註(A-B-N)と
略記する

(A 地区出土、土器 → 後期) → P · P · L 2



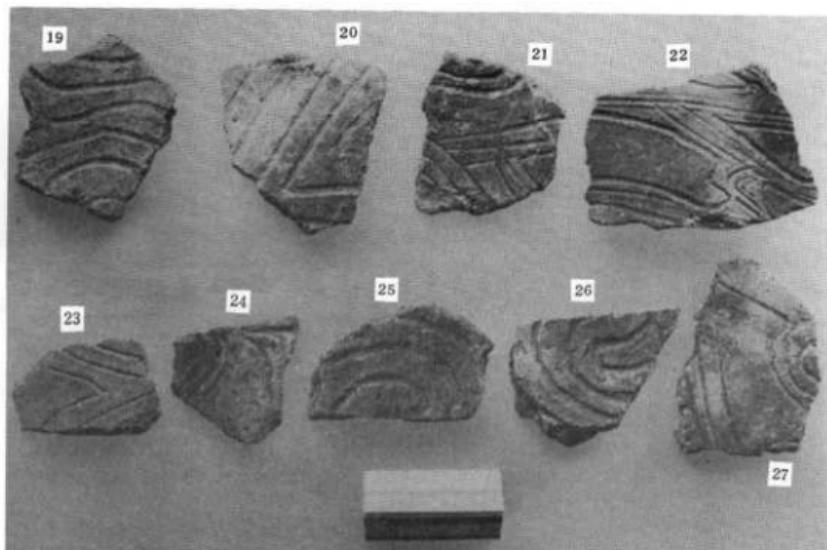
☆ (A 地区出土、土器) → P · P · L 2

- ここに掲げたものも、縄文時代後期「十腰内 I 式土器」の胸部破片である。
- 沈線文が曲線のもの、斜行するもの、2~3条が平行するもの、区画文となるもの等々、施文パターンを捉えることがむずかしいものである。
- 破片のカーブからみて、深鉢形の破片と思われる

☆ (A-B-N) 出土 ←

以下土器について、A 地区 B 層 - N 層出土のもの、その他も
() のように略記する。

〔A地区出土、→後期〕→P・P・L 3



☆〔A地区出土、土器→後期〕→P・P・L 3

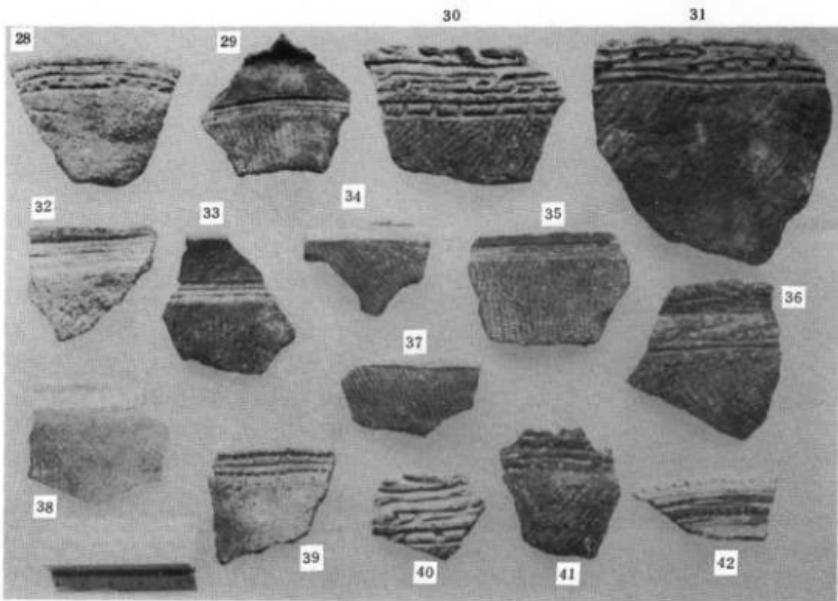
- ここに掲げたものも縄文時代後期「十腰内I式土器」の胴部破片である。
- 破片のカーブから推定すれば、深鉢か、菱形土器のものと思われる。
- P・P・L 1～P・P・L 3—(1～27)にわたって掲示したものは、「十腰内I式土器」の口径部、胴部の施文パターンの一部を提示したものである。

☆(1～27)の口径部パターンを分類すると、つぎの分類が可能である。

- | | |
|---------------|----------|
| a. 折り返えし口縁のもの | } 口縁の大分類 |
| b. 平縁のもの | |
| c. 波状口縁のもの | |

☆(A-B-III・IV)出土。

[A 地区出土、土器] (P · P · L 4 ~ 10 → 晚期) P · P · L 4



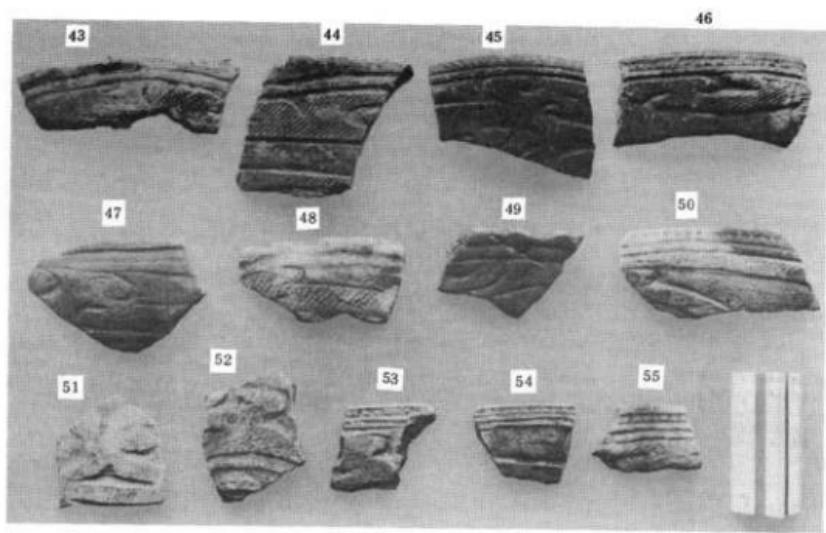
☆ [A 地区出土、土器 → 晩期] → P · P · L 4

- ここに掲げたものは、いずれも縄文時代晩期の土器である。
- このうち、(28 · 30 · 31 · 36 · 39 ~ 42)は、縄文晩期「大洞C 1式」の土器である。なおそのうち、(30 · 31 · 36 · 40)は、「大洞B · C式」の名残りが強く羊齒状文(しょくしょうもん)の要素が認められる。
- (29 · 32 ~ 35 · 37 · 38)のうち、(34 · 35 · 37 · 38)は、肩部の内傾が強く、このものは、「大洞C 1式」であろう。また、(29 · 33)は、頸部に無文帯を有するので「大洞C 1式」後半に出現するようである。(32)は、ノーマルな「大洞C 2式」であろう。

☆なお、(40 · 42)は精製土器である。(28 ~ 42)を含めて、深鉢か鉢形土器と思われる。

☆ (A - B - III · N) 出土。

〔A地区出土、土器〕(P・P・L5→晩期) P・P・L5

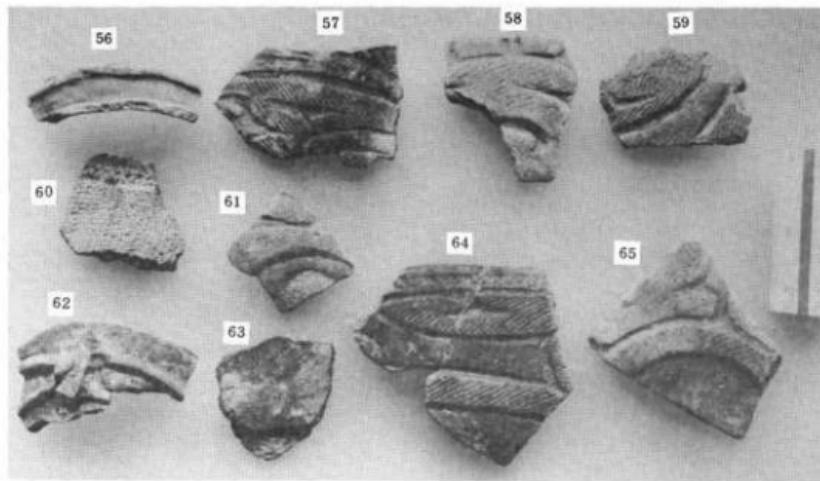


☆〔A地区出土、土器〕→P・P・L5

- ここに掲げたものは、縄文時代晩期「大洞C1式」の精製土器を一括したものである。
- 器形は、(51—55)は鉢形土器で、(43~48・50)は、皿形土器である。なお(49)は波状口縁で、深鉢形の可能性が強い。
- 施文は、「大洞C1式」の主文様である刻目文・x字文・k字文が見られ、磨消縄文手法を用いている。

☆(A-B-III)出土。

〔A地区出土、土器〕(P・P・L 6→晩期) P・P・L 6



☆〔A地区出土、土器〕→P・P・L 6

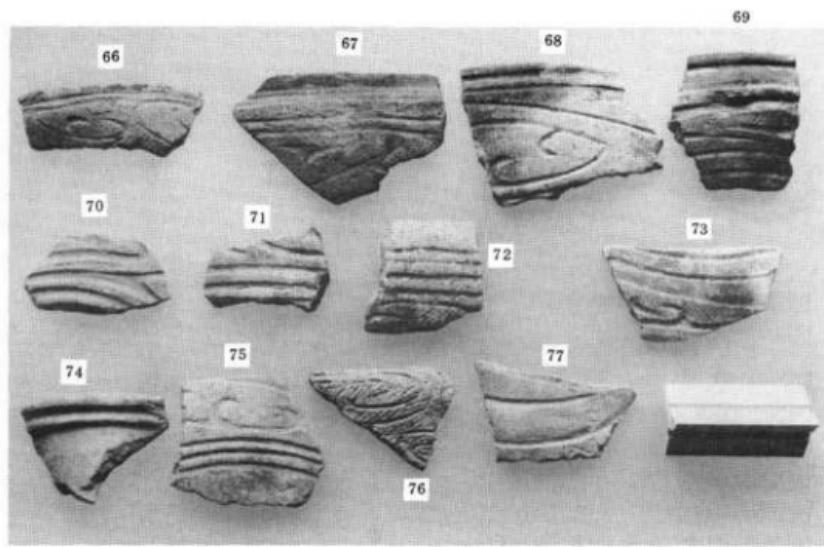
- ここに掲げたものも縄文時代晩期の土器である。
- このうち、(60)は粗製土器で、他は精製土器である。
- (56・62・64)は、「大洞C2式」、他はすべて「大洞C1式」土器であろう。
- また、器形は、深鉢形(60)、壺形(56・62)、皿形(61・65)で、他は鉢形土器と思われる。なお(63)は不明である。

☆(60)を除き、他は磨消縄文の手法を見せるもので、施文は浮彫り状の雲形文である。

なお(64)は施文が曲線化しているので「大洞C2式」とした。

☆(A-B-III)出土、(但し、60はII出土)

(A 地区出土、土器) (P · P · L 7 → 晚期) P · P · L 7



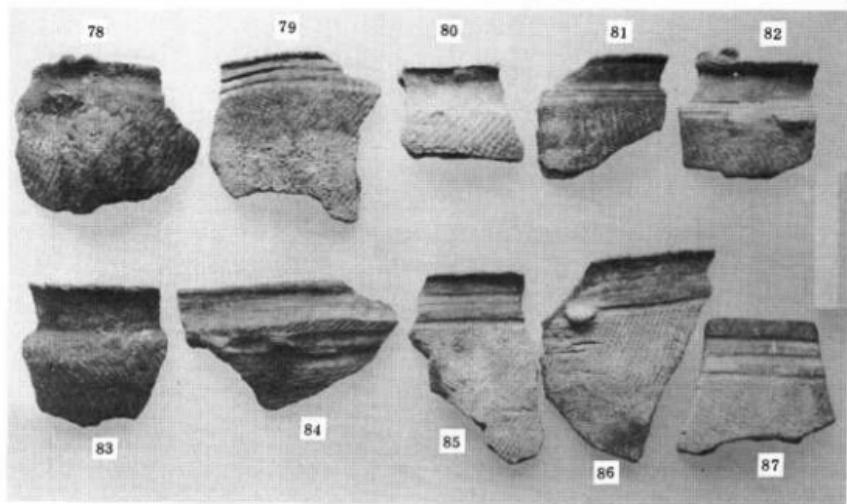
☆ (A 地区出土、土器) → P · P · L 7

- ここに掲げたものは、すべて「大洞C 2式」の精製土器である。
- 器形は、(66) は皿形、(74) は壺形口頸部で、他は鉢形か深鉢形土器であろう。
- なお、施文をみると、(66 ~ 68 · 73 ~ 77) は「大洞C 2式」のノーマルなものであり、(67 ~ 72) は、「大洞C 2式」の後半のものと認められる。

☆この「大洞C 2式土器」の施文は、一型式前の「同C 1式」の主文様が横に流れるもの、沈線が曲線化または平行沈線化する。さらに「大洞C 2式」期の後半になると (70 ~ 72) のように、入組み工字文の前段階を示す文様もあらわれる。(筆者)

☆ (A - B - III) 出土。

〔A地区出土、土器〕(P·P·L 8→晩期) P·P·L 8

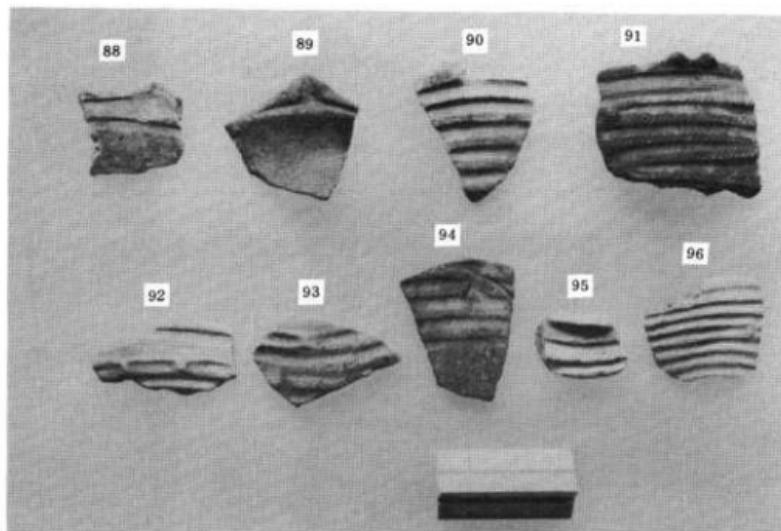


☆〔A地区出土、土器〕→P·P·L 8

- ここに掲げたものは、「大洞C 2式」の粗製土器を一掲したものである。
- この期のものは、3条を基本とした沈線文が頸部、肩部に施文されるのが特徴である。
(78・81・85~87)、また、既述したように「大洞C 2式」の後半になると、(78・80・82~84)のように頸部に無文帯をもつようになり、このものには、3条を基本とする沈線文は、肩部へ下がるようである。(筆者)
- 器形は、大、小の相違はあるが、鉢形か深鉢形土器である。

☆(A-B-III)出土、(但し78・84はB-II)

〔A地区出土、土器〕(P・P・L9→晩期) P・P・L9



☆〔A地区出土、土器〕→P・P・L9

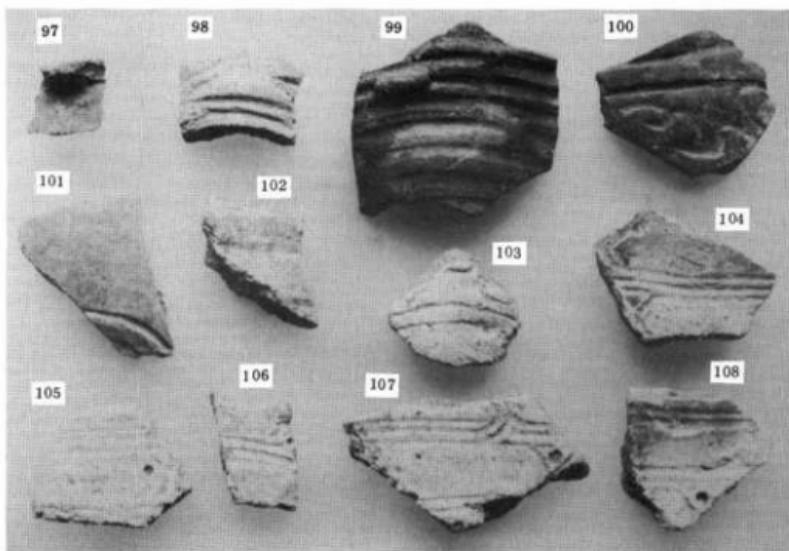
- ここに掲げたものは、「大洞A式」の精製土器を一括したものである。
- このもののうち、(89・95・96)は、壺形土器の口頸部で、他は、鉢形か深鉢形土器と思われる。

☆(92、93)は、「大洞A式」の小突起と短沈線が見られ、他の(88・90・91・94・96)は入組み工文字が認められるもので、この両者が「大洞A式」の主文様の一部である。

☆本遺跡では、第一・二次発掘調査をとおして、下限型式は、縄文晩期では、「大洞A式」である。

☆(A-B-II・III)出土、(但し、90・95・96は、B-II)

(A 地区出土、土器) (P · P · L 10 → 晚期・後期) P · P · L 10



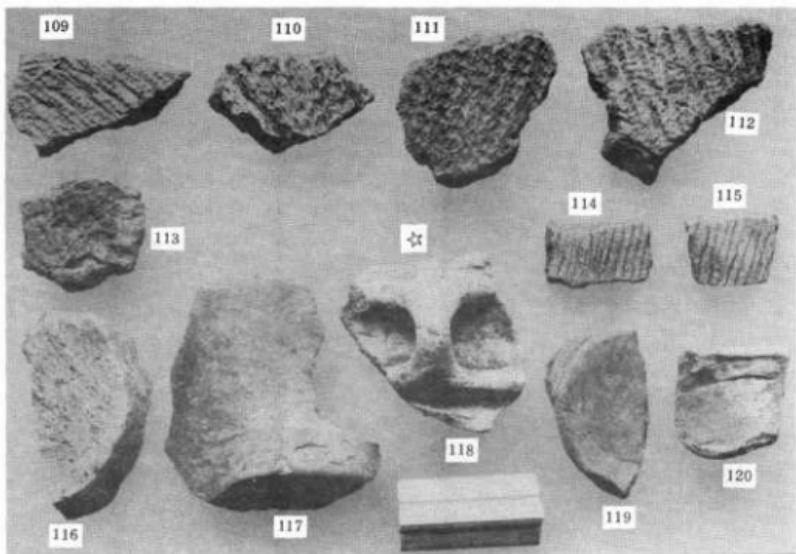
☆ [A 地区出土、土器] → P · P · L 10

- ここに掲げたものは、縄文時代晚期、後期の土器である。
- (98 ~ 100)は晚期の土器で、(99)は「大洞 A 式」(100)は、羊齒状文が認められることから、「大洞 B · C 式」土器と思われる。すなわち、この「大洞 B · C 式」土器は、本遺跡では、晚期の上限型式であるが、これのみ 1 片の出土である。また、(98)、沈線文の太さから「大洞 A 式」と思われる。
- (97 · 101 ~ 108)は、縄文時代後期初頭「十腰内 I 式」土器である。
- (97 · 101)は、精製、他は、粗製土器である。(97 · 101)は器形は不明、他は、變形土器の破片であろう。既述のように 2 ~ 3 条を基本とする沈線文が区画文をなし、(105 · 107 · 108)のように円形文も押圧により施文される。

☆この(P · P · L 10)のように、「十腰内 I 式」期において、精製・粗製の土器が明確に分かれるようになる。

☆ (A - B - N) 出土 (層位的に混入している。)

[B 地区出土、土器] (P · P · L 14 → 後期) P · P · L 11



☆ [B 地区出土、土器] → P · P · L 11

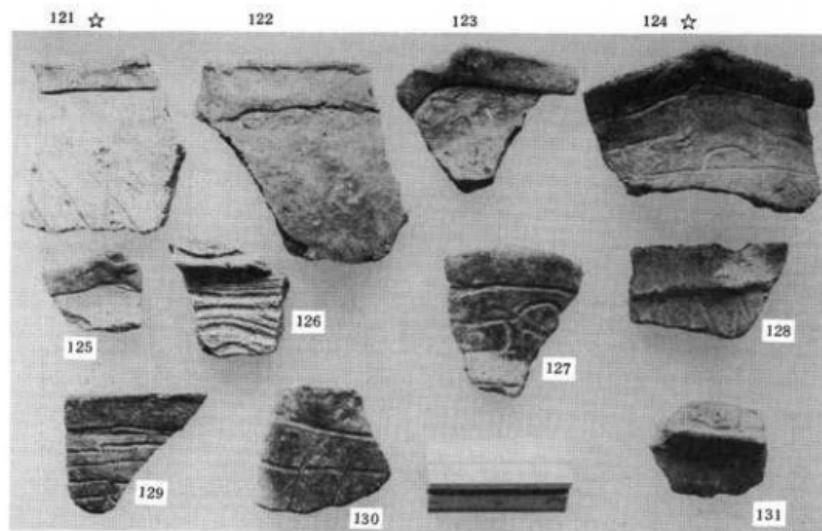
- ここに掲げたもののうち、(109~113)は、縄文時代前期の土器である。小片のため型式名の判定はできないが、胎土内に繊維を含んでいる、「円筒下層式」土器のものであろう。
- また、(114・115)は、同一個体のものと考えられるが胎土に砂粒を含むこと、および施文から縄文時代中期の「円筒上層式」土器と思われる。
- (118)は把手のある「十腰内 I 式」の土器 (120)は、型式名は不明、(116・117・119)は底部で、ともに「十腰内 I 式」土器である。

☆本遺跡出土、土器のうち、縄文時代の上限土器は、既述した円筒下層式土器（前期）であるが出土数は 10 片程度で少ない。

☆ (B-B-N 2) 出土、(但し 109~113 は A-I 出土)

☆ (P · P · L 11~118 は、土器 1 の標式土器である。)

〔B地区出土、土器〕(P・P・L 12→後期) P・P・L 12



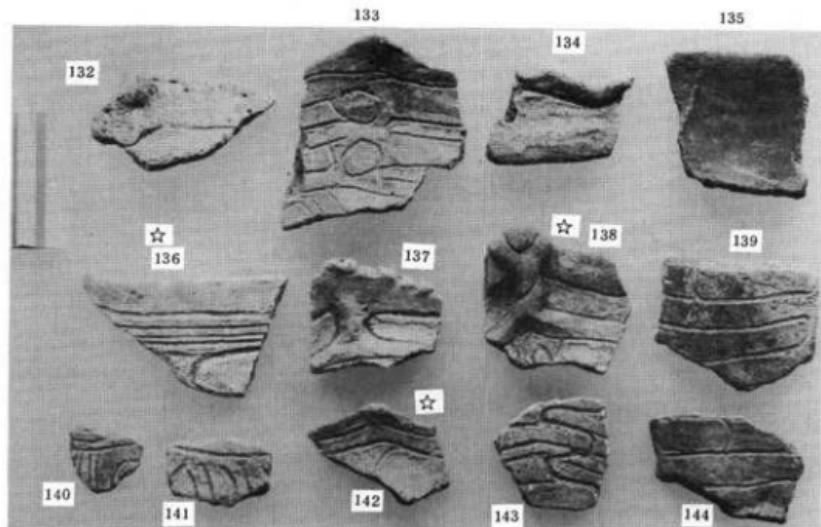
☆〔B地区出土、土器〕→P・P・L 12

- ここに掲げたものは、「十腰内Ⅰ式」土器である。
- そして、この型式の最も一般的なものを提示した。
- (121~125・127~129)は、いずれも折り返えし口縁のもので、さらにこの口縁形態は、平縁と波状口縁に分けられる。
- また(126)は複合口縁のもの、(131)は、内傾する頸部に円文のあるもので、両者とも一般的に、この期に出土するものである。
- また(129)は、「十腰内Ⅱ式」の可能性があるが断定は控える。
- ここに掲げたものの器形は、鉢形、深鉢形と思われる。(131)のように頸部が強く内傾する、鉢形土器もこの期の特徴である。

☆〔B-B-N〕出土、(但し、124は、B-N 2出土)

☆(P・P・L 12-121は、土壤2、P・P・L 12-124は土壤3に伴う)

〔B地区出土、土器〕(P・P・L 13→後期) P・P・L 13



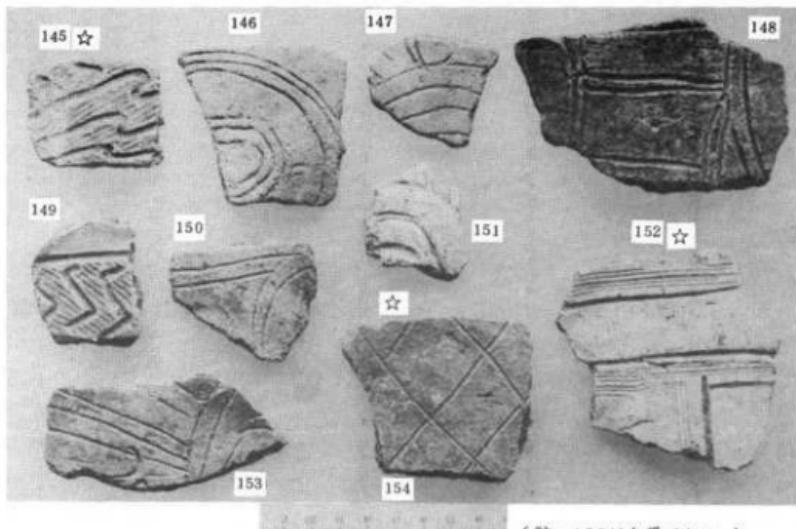
☆〔B地区出土、土器〕→P・P・L 13

- ここに掲げたものも、縄文時代後期「十腰内I式」土器である。しかしそのうち、(139・143・144)は、「十腰内II式」の可能性があると思う。
- また(132)は、断定は控えるが「晚期」のものらしい。いま少し類例を持ちたいと思う。
- 他はすべて「十腰内I式」土器でその施文法は沈線文が主体をなし、多様で自由な表現がこの期の特徴である。なお(135)は無文である。
- 器形はいづれも深鉢形、または壺形土器であろう。

☆(B-B-N 1)出土 (B地区では、Ⅲ層を欠く。)

☆(P・P・L 13-138は土壤3、136は土壤4、142は土壤5の直上出土)

〔B地区出土、土器〕(前・中期→P・P・L 11、後期P・P・L 11~14)
P・P・L 14



(註・155は欠番である。)

☆〔B地区出土、土器〕→P・P・L 14

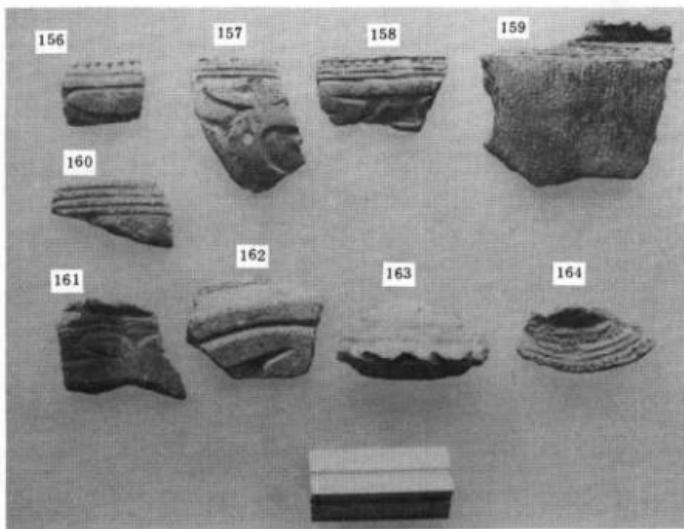
- ここに掲げたものも、繩文時代後期初頭「十腰内I式」土器の胴部破片である。
- 「十腰内I式」土器の施文の各種として提示した。(145)の波状(149)のS形文(146・147・150・151)の円形回旋文、(148)の変形格子自区画文、(153)の円形回旋文と斜行沈線文、(154)の網目状沈線文、(押圧撫糸文もある)および(152)の刷毛自状沈線文、方形区画文等々その施文パターンは、きわめて自由奔放である。

☆この施文法の多様性は、当時の社会の安定性や生活の豊かさを反映していると考えてはどうであろうか？

☆(B-B-N 2)出土

☆(P・P・L 14~145は、土壤6、154は、土壤8、152は土壤9の直上出土。)

[B地区出土、土器] (P・P・L 15~16→晩期) P・P・L 15



☆[B地区出土、土器]→P・P・L 15

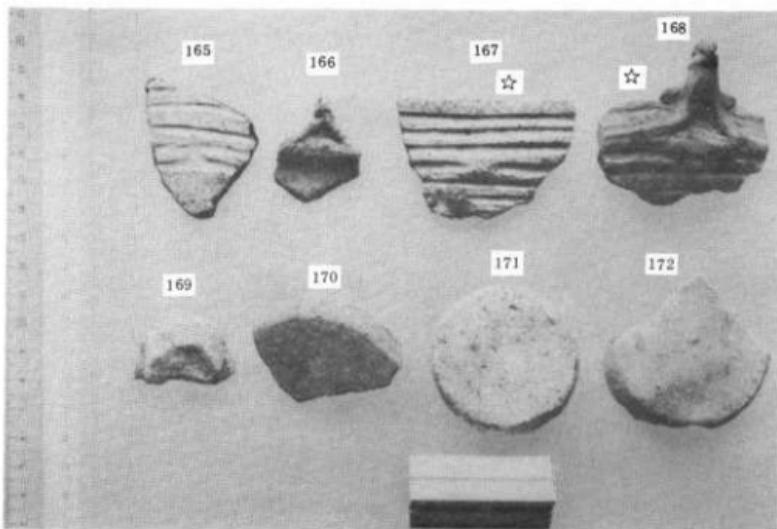
- ここに掲げたものは、すべて縄文時代晩期の土器である。
- このうち(159)は粗製の深鉢形土器で「大洞C1式」土器である。
その他のものは、すべて精製土器であるが、(156~158)は、皿形土器、(163・164)
は、注口土器の一部分と思われる。また(162)は鉢形土器であろう。
- これらの(156~159・162~164)は、いずれも「大洞C1式」土器である。
- (160・161)は、その施文から「大洞C2式」の鉢形か深鉢形土器と思われる。

☆すなわち、「大洞C1式」の特徴である刻目文が認められる。(156~159・162~164)

また、(160・161)は、平行弦線文と雲形文が施文されるもので、(161)は、「大
洞C1式」の可能性もある。

☆(B-B-N 2)出土

[B地区出土、土器] (P・P・L 16 → 晩期・後期) P・P・L 16



☆ [B地区出土、土器] → P・P・L 16

- ここに掲げたもののうち、(165~168) は、縄文時代晩期「大洞A式」土器である。このもののうち (166・168) は、1ヶの把手を持つ、鉢形か台舟鉢形土器であろう。
- また、(165・167) は、平行工字文、または、小突起を肩部を持つもので「大洞A式」の鉢形・深鉢形土器と思われる。特に (167) は、口縁上端に斜行する縄文の施文が帯状に一周するものである。この施文法は、「A式」において再び出現する傾向がある。

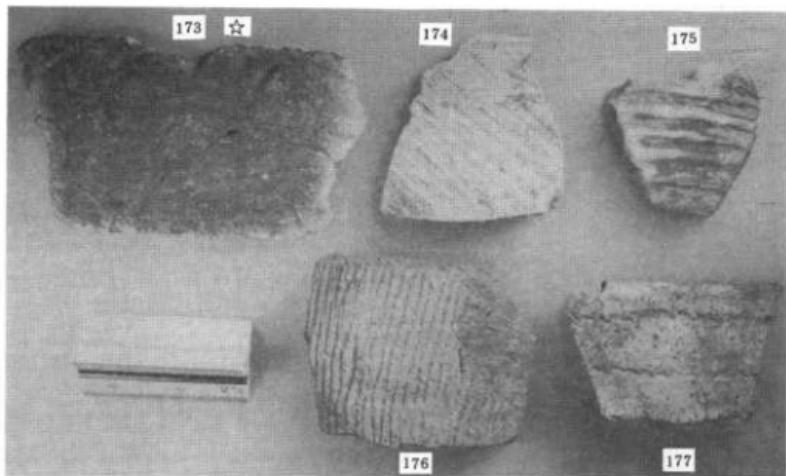
(筆者)

- さらに、(169) は、手づくねによる袖珍土器、(170~172) は、縄文時代後期の底部であろう。

☆ (B-B-N 2) 出土

☆ (P・P・L 16 - 167・168 は、土壙 7 に伴う。)

〔B地区出土、土器〕(各形式→P・P・L 17) P・P・L 17



☆〔B地区出土、土器〕→P・P・L 17

*ここに掲げたものは、B地区出土の各型式の土器である。

☆特に(173)は、第11図に示した〔土壤4〕に密着して出土したもので、「土壤4」の時期を決定する重要な手がかりとしたもので、縄文時代後期初頭「十腰内I式」土器である。

*また、(174)の施文は、特殊なもので、類例を待ちたいものであるが、一応後期初頭としておきたい。

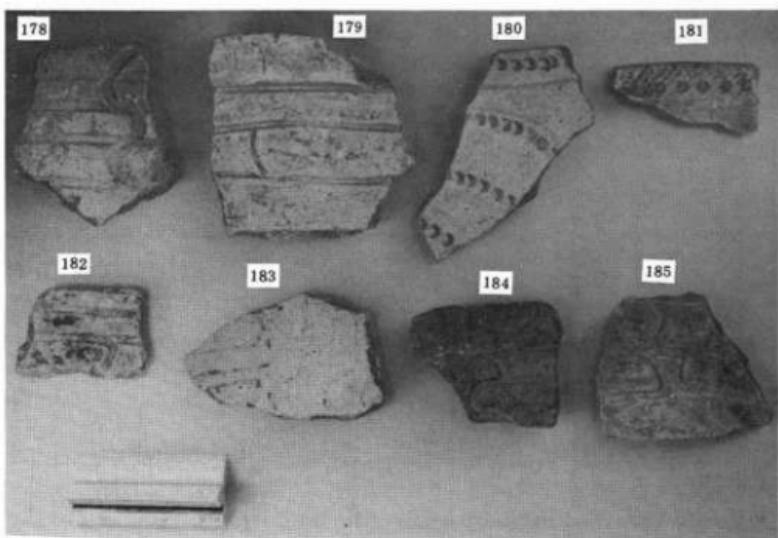
*さらに(176)は、(P・P・L 11-114・115)と同様の施文、胎土のもので、同一個体の疑いもある。このものは、縄文時代中期のものであろう。

*(175)は「大洞A式」、(177)は、頸部に2条の押圧撓糸文のあるもので、器厚等から一応中期初頭のものとしておくが、類例を待って再考したい。

☆(B-B-II)出土(但し、173は下記)

☆(P・P・L 17-173は、土壤4に密着出土、層位はB-C-V出土である。)

[C 地区出土、土器] (P · P · L 18~22 → 中期・後期) P · P · L 18



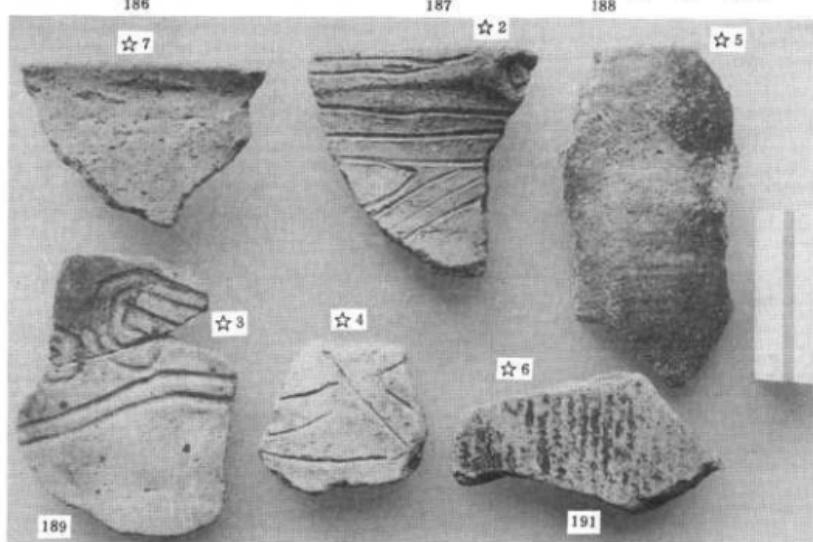
☆ [C 地区出土、土器] → P · P · L 18

- ここに掲げたもののうち、(180・181)は、縄文時代中期の「円筒上層 b 式」土器と思われる。
- また、(178・179・182・184・185)は、ほぼ平行する沈線文を縦位の S または 2 の沈線によって上下の平行沈線文を連結する手法が見られ、「十腰内 II 式」土器と思われる。
- (183)は、写真が不鮮明であるが「十腰内 I 式」土器である。
- 器形は、(178・179・182・183)は深鉢形、(184・185)は、やや小形の深鉢形土器であろう。

☆ (C-B-N) 出土

(C 地区出土、土器) (P · P · L 19 → 中期・後期・晚期・土師器)

P · P · L 19



☆(C 地区出土、土器) → P · P · L 19

- ここに掲げたものは、{ C 地区 H 1 - 9 + 10 } にわたる粘土堆内より出土したもの (188, 191) を示したものである。
- (186) は、土師器の壺形土器で、「東北北部の土師器形式」第二形式のものである。
- (187 · 189 · 190) は、その施文から「十腰内 I 式」土器で、深鉢形か壺形土器と思われる。
- (188) は縄文が、上半は斜行・後半は横走しており、器厚がうすく、晚期のものである。
- (191) は縄文時代中期の円筒上層式土器である。

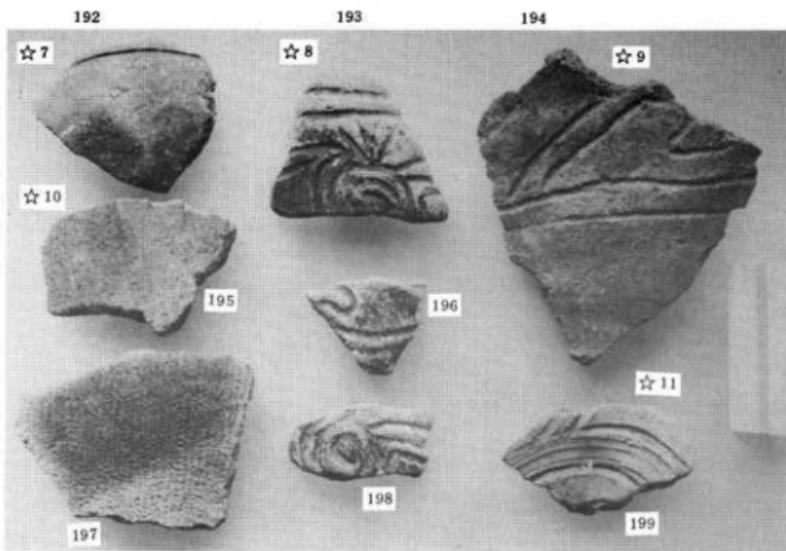
☆すなわち、中期・後期・晚期の土器が、出土している事実は、最も新しい土師器の時期に攪乱があったことを意味しているように思われる。

☆(C - B - N 上、粘土堆直上、粘土堆内出土)

☆(☆印の 2, 3, 4, 5, 6) は、粘土堆 (第 13 図) の土器番号である。

[C 地区出土、土器] (P · P · L 20 → 後期・晚期・土師器)

P · P · L 20



☆ [C 地区出土、土器] → P · P · L 20

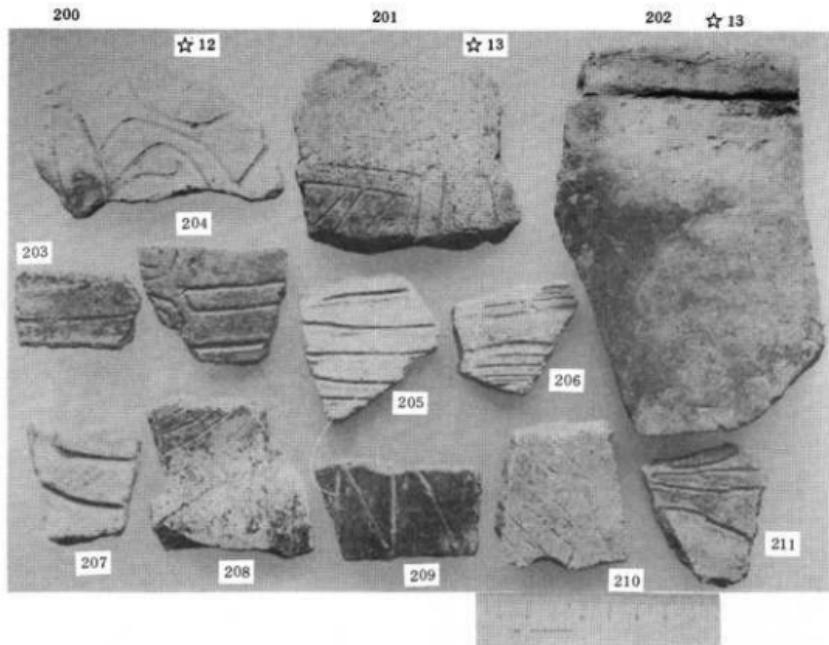
- ここに掲げたものも (P · P · L 19) と同様、(C 地区 H 1 — 9 、 10 区) より出土した「粘土堆」内より出土した土器片である。(第 13 図)
- このもののうち、(195) は、土師器變形片で、ヘラ削り痕を表面に認める。
- また、(192 ~ 194 + 196 + 198 + 199) は、「十腰内 I 式」土器、(197) は、縄文のこまかさや、縱走することから、晩期のものであろう。

☆したがって (P · P · L 19) で述べたように、「粘土堆」の造成期、すなわち、土師器（第二型式）の使用時代に攪乱されたものと考えられる。

☆ (C - B - N 上) 粘土堆内および付近出土

☆ (☆印の 7 、 8 、 9 、 10 、 11) は (第 13 図) 粘土堆内出土土器

[C 地区出土、土器] (P · P · L 21 → 後期) P · P · L 21



☆ [C 地区出土、土器] → P · P · L 21

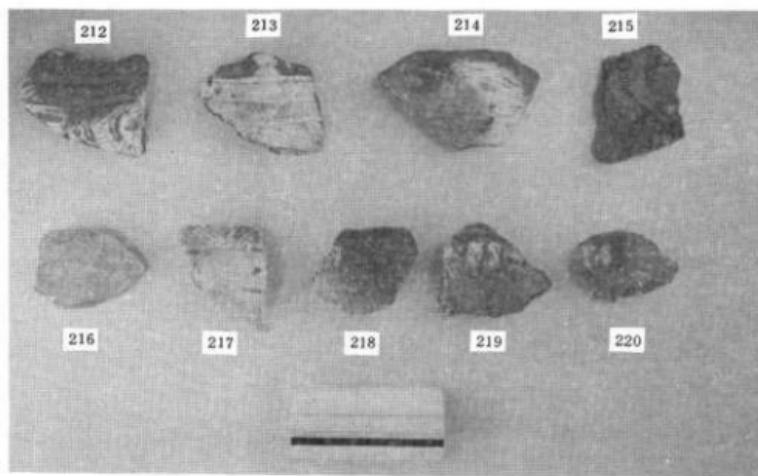
- ここに掲げたものも (C 地区 H 1 — 9 、 10 区) にわたる「粘土堆」内およびその周辺より出土したものである。
- すべて「十腰内 I 式」土器であって、折返えし口縁をもつもの (202) 、口頸部が無文のもの (201) 、区画文のもの (203 · 204) 、網目状文のもの (209 · 210) 、曲線文のもの (200 · 207 · 208 · 211) 、やや平行する沈線文のもの (205 · 206) である。

☆これらの (200 ~ 211) は、 (P · P · L 19 · 20) と同様「粘土堆」造成時に混入したものと思われる。

☆ (C - B - M 上) 出土

☆ (☆印の 12 、 13 、 13) は、粘土堆内Ⅲ層出土である。

(C 地区出土、土器) (P · P · L 22 → 後期) P · P · L 22



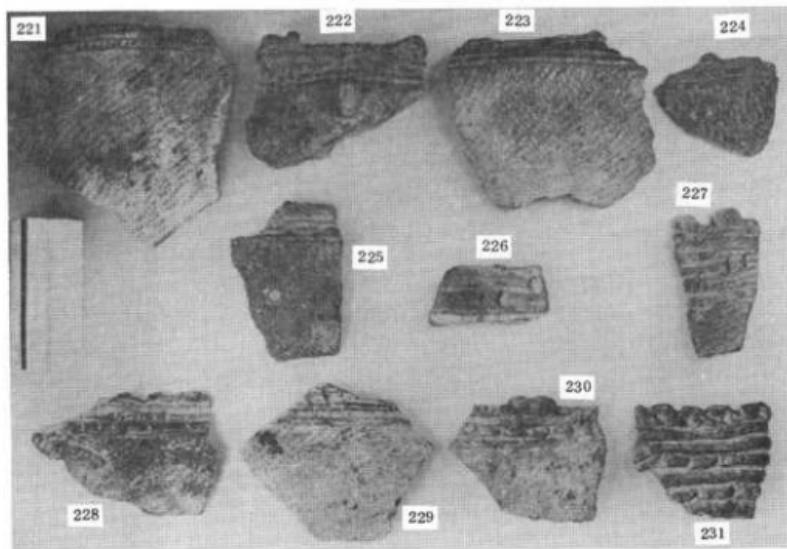
☆ (C 地区出土、土器) → P · P L 22

- ここに掲げたものは、いずれも後期の土器である。
- これらのうち、(212~218) は「十腰内 I 式」土器であり、(219·220) は、「十腰内 V 式」土器である。いわゆる瘤付土器とも言われるものである。
- (212~218) は、鉢形土器の破片とも推定される。また (219·220) は、小片のため器形は不明である。

☆ 「十腰内 V 式」土器は、当西北五地方では、標式遺跡である。十腰内遺跡の他は、まとまって出土する遺跡は目下少ない現状である。

☆ (C-B-I Ⅲ下) 出土。

[C 地区出土、土器] (P · P · L 23 ~ 26 → 晚期) P · P · L 23

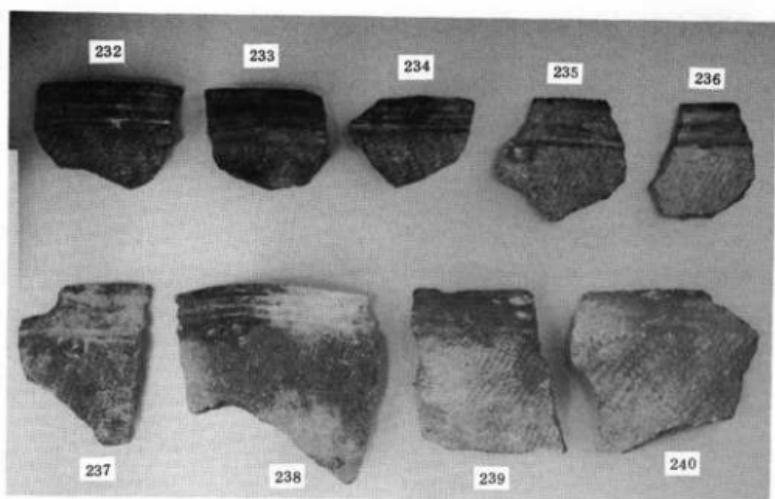


☆ [C 地区出土、土器] — P · P · L 23

- ここに掲げたものは、いずれも縄文時代時代晩期「大洞 C 1 式」の粗製土器である。
- このうち、(222 · 231)は、前型式である「大洞 B · C 式」の名残りを止める施文がある。他のものも前型式の要素を残存しているが、文様帶の口徑部には、刻目文が見られ、「大洞 C 1 式」のものである。
- 器形は、鉢形か深鉢形土器と考えられる。

☆ (C - B - II) 出土

〔C地区出土、土器〕(P・P・L 24→晩期) P・P・L 24



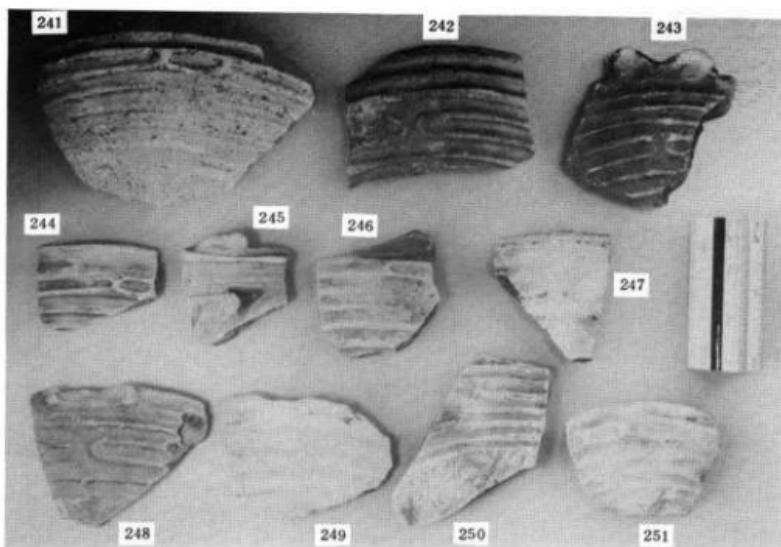
☆〔C地区出土、土器〕→P・P・L 24

- ここに掲げたものは、すべて「大洞C 2式」の粗製土器を一括したものである。器形は、深鉢形と思われる。
- この期は粗製土器には、3条を基本とするやや幅の広い浅い沈線文が頸部に施文され、肩部下は斜縄文が施文される。
- 但し(237・239)は、沈線文が2条で、その間の頸部は無文帯をなすものである。

☆施文される斜縄文は、(L・R)が主体で、(234)は(R・L)の斜縄文が施文されている、このものはごく少數である。

☆(C-B-I)出土

[C 地区出土、土器] (P · P · L 25 → 晚期) P · P · L 25

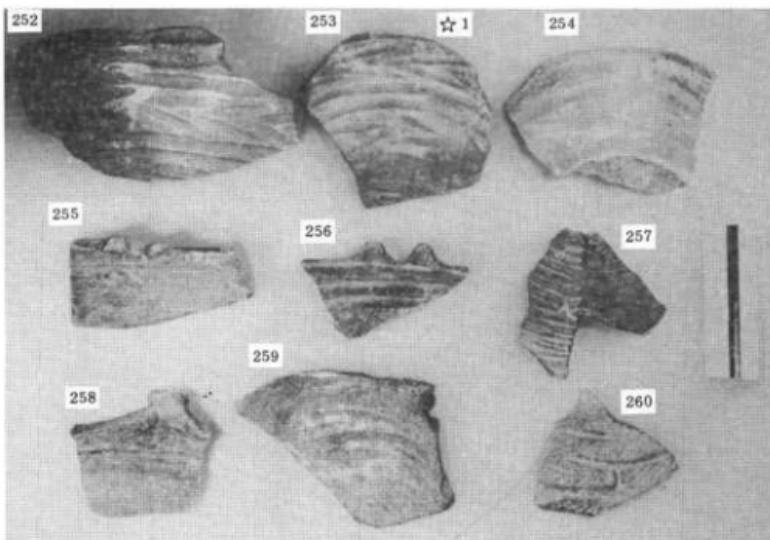


☆ [C 地区出土、土器] → P · P · L 25

- ここに掲げたものは、「大洞 A 式」の土器を一括したものである。すべて精製土器であって、器形は鉢形か深鉢形土器であろう。
- 施文は、いわゆる「入り組み土字文」のものである。すなわち「入り組み土字文」と小突起 (A 式特有の) の組合せによる施文パターンを見せるもので、(243 + 245) には口縁に突起を有している。この突起のあり方も各種存在する。

☆ (C - B - II) 出土、(但し 250 + 251 は、C - A - I 出土である。)

[C地区出土、土器] (P・P・L 26 → 晩期) P・P・L 26



☆[C地区出土、土器]→P・P・L 26

- ここに掲げたものも縄文時代晩期「大洞A式」の土器である。いずれも精製土器で、器形は、鉢形か深鉢形土器であろう。
- このもののうち、(252・253)は「矢羽根状文」または「綾杉状文」と呼ばれる施文のもので、当地方では、その出土数は少ない。
- また、(254・257・259・260)は、(P・P・L 25)でも述べた「入り組み工字文」の施文されたものである。
- (255・256・258)は、口縁部破片であるが、突起の形態、施文、口唇部の沈線文等から「大洞A式」とした。

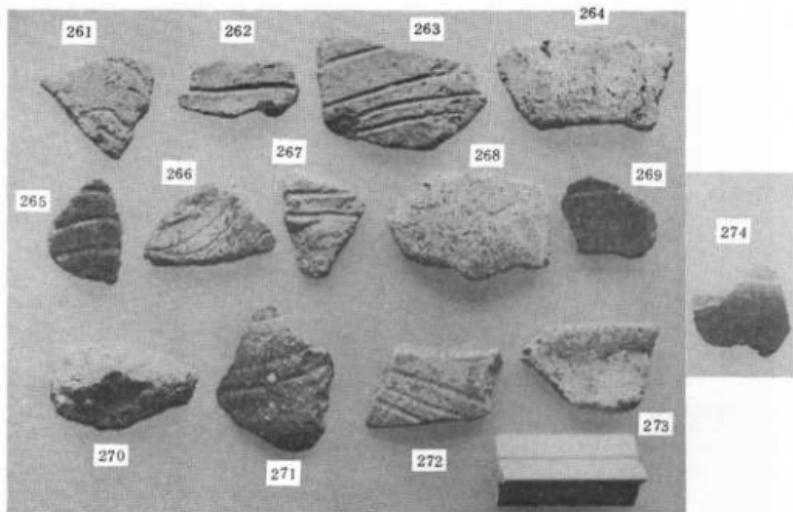
☆「大洞A式」土器の施文パターンは、本遺跡では2種類のものが出土した。すなわち、「入り組み工字文」と「綾杉状文」である。前者が主流を占めており、後者は少ない。

☆(C-B-II)出土、(但し253はC-B-III出土)

☆(P・P・L 26-253)は、(第13図)の1の土器片で粘土堆直上出土

(D 地区出土、土器) (P · P · L 28 → 堀状遺構トレンチ出土)

P · P · L 27



☆ (D 地区出土、土器) → P · P · L 27

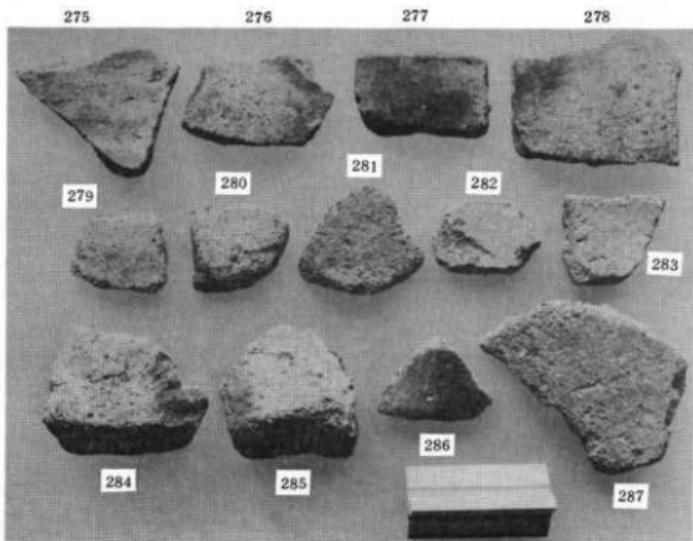
- ここに掲げたものは、堀状遺構のある D 地区のトレンチより出土したものと一括した。
- このもののうち、(261 ~ 263 · 265 ~ 267 · 269 · 271 · 272)は、その施文から「十腰内 I 式」土器片である。
- また、(264 · 268 ~ 270 · 273)は、二次的に火を浴びたもので無文のものであるが纏文土器である。おそらく「十腰内 I 式」のものと考えられる。

☆ (274)は、小片であるが、須恵器片であって、上記のものと併出した。このものはタタキ目のないことから、長頸壺の破片と推定される。

☆ ここに掲げたものは、トレンチの西端 (第 14 図) ローム質粘土、すなわち揚げ土の中より出土したものである。

〔D地区出土、土器〕(P・P・L 28 →堀状遺構トレンチ出土)

P・P・L 28

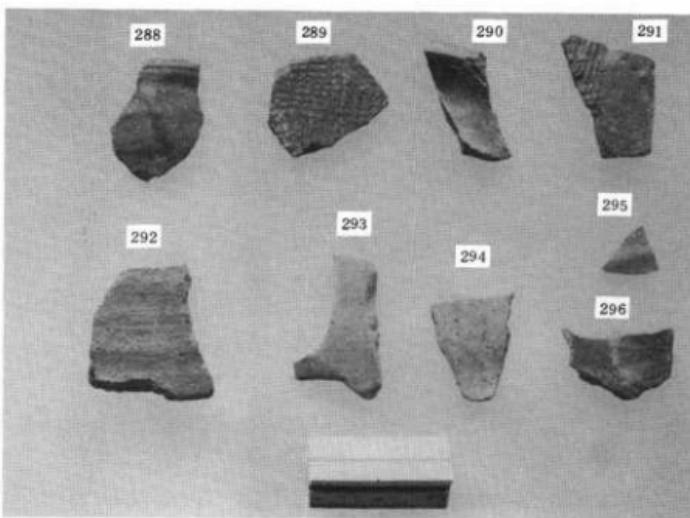


☆〔D地区出土、土器〕→P・P・L 28

- ここに掲げたものも(P・P・L 27)で述べたとおり、堀状遺構に設定したトレンチ内より出土したものである。
- いずれも無文で、土器型式は不明であるが伴出した(P・P・L 27)の土器に「十腰内I式」土器が見られるので、多分同期のものと推定される。

[B・C 地区出土、杉恵器・珠洲焼・その他] (P・P・L 29)

P・P・L 29



☆ [B・C 地区出土、須恵器等] → P・P・L 29

- ここに掲げたものは、B・C 地区より出土した須恵器、珠洲焼、その他の土器である。
- このもののうち、(288・289・295)は、B 地区の出土で、(290・291・292・296)は C 地区の出土である。いずれも縄文後期「十腰内 I 式」土器、および晩期の土器と共に伴して出土したものである。
- このうち (292) は、珠洲焼であり、(288～291・295・296) は須恵器である。

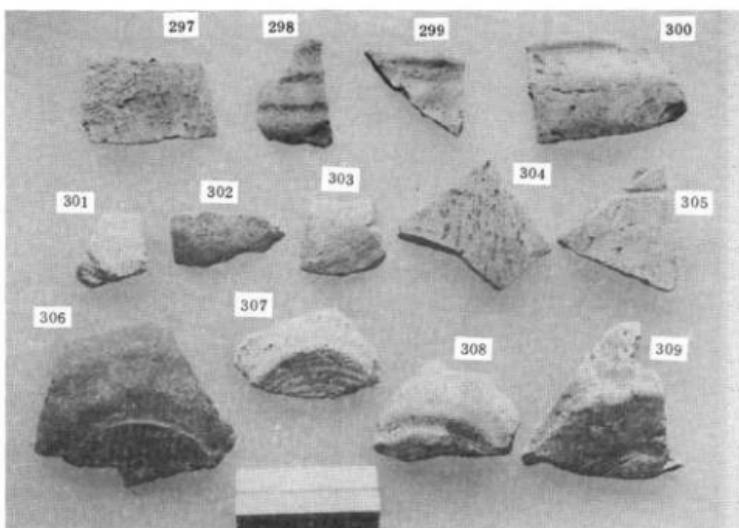
☆また、その他の土器としたものは、(293・294) で、きわめてろいもので黒色を呈し時期その他不明である。

- このうち (288) は楕形、(289) は菱形、(290) は長頸壺の口頸部、(291) は菱形、(295) は楕形の須恵器であろう。

☆ (292) は、(C 地区 H 3—9 区 B—I 層) 出土の珠洲焼片で器形は不明である。

☆ [B・C—B—I～II] 出土、(搾乱のため混在して出土)

(C 地区出土、土師器) (P · P · L 30 → 土師器) P · P · L 30



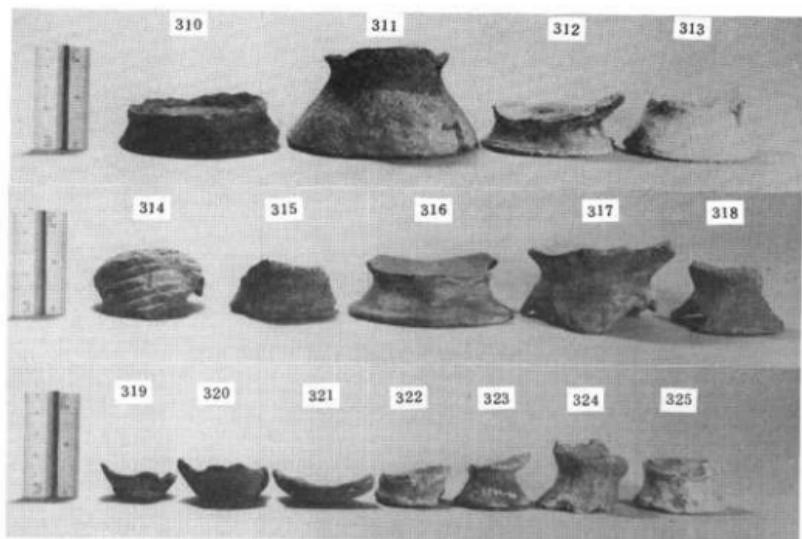
☆(C 地出土、土師器) → P · P · L 30

- ここに掲げたものは、すべて土師器である。このうち、杯形は(298~303・306~309)で壺形は(297・304・305)である。
- 壺形土師器のうち、(298)には、ロクロ痕が認められ、また(306~308)には回転ロクロによる「糸切り痕」が認められる。(但し309はへら切り)
- 壺形土師器のうち(305)には、沈線があり、その他のもの(297・304)および(309)を含めて「へら削り」による整形が認められる。

☆回転ロクロによる糸切り痕やその器形から「東北北部の土師器型式」第二型式に属するものと考えられる。

☆(C-B-I ~ N) 出土、(繩文土器と混在する)

[台付土器台部・袖珍土器] (P・P・L 31 - 晩期) P・P・L 31

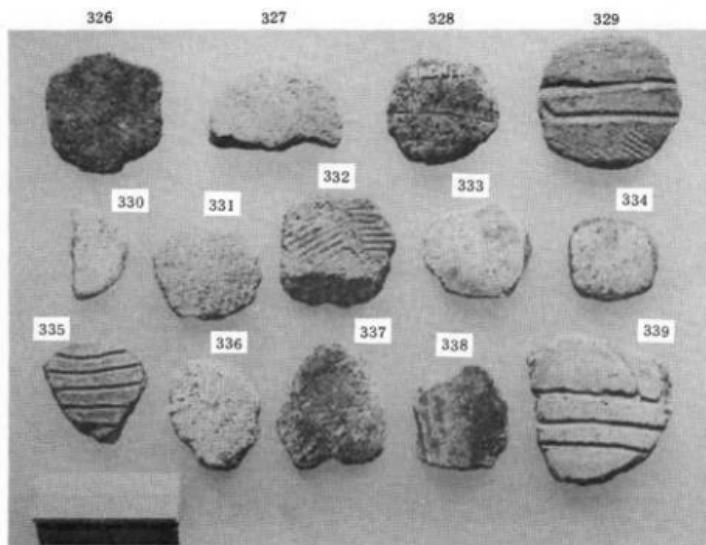


☆[台付土器台部・袖珍土器] → P・P・L 31

- ここに掲げたものは、A・B・C地区から出土した、台部、および袖珍土器を一括して提示したものである。これらのものはすべて縄文晩期のものである。
- このもののうち(310~313)はA地区、(314~318)はC地区、出土のもので、それぞれ{A-B-III}、{C-B-II}出土である。
- また(319~325)は袖珍土器を一括して掲示した。このうち(325)はB地区(B-B-III)出土、(319~324)はC地区(C-B-II)出土である。なお(319~325)とも手づくねによって作られたものであろう。

(A・C 地区出土、円盤状土製品) (P・P・L 32 → 各期)

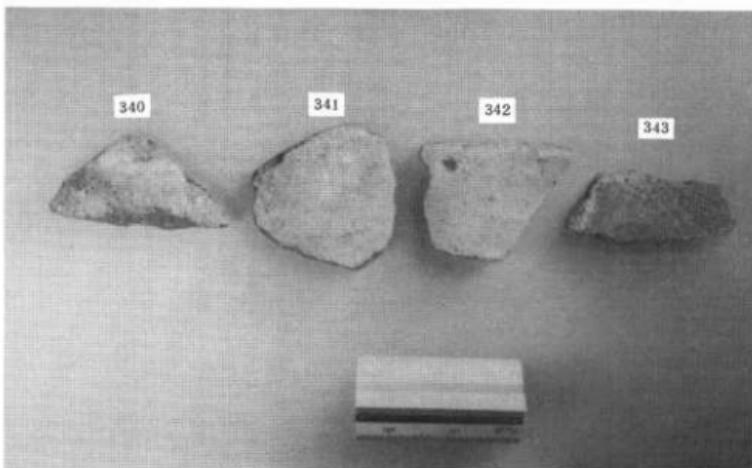
P・P・L 32



☆〔円盤状土製品〕→ P・P・L 32

- ここに掲げたものは、A地区 (A-B-I Ⅲ・N) 出土、およびC地区 (C-B-II) 出土の土器片を利用した円盤状土製品である。
- A地区Ⅲ層出土のもの (331・332・337) の3こ、およびN層出土のもの (339) の1こである。また、C地区II層出土のものは、(326～330・333～336・338) である。
- (332) は、縄文中期の土器片、(331・337) は、縄文晚期の土器片を利用したものであろう。(A地区出土)
- C地区出土のものは、「十腰内I式」の土器片を利用しているものである。また (339) も同様である。

[製塩土器の疑いある破片] (P · P · L 33) P · P · L 33



☆ [製塩土器の疑いあるもの] → P · P · L 33

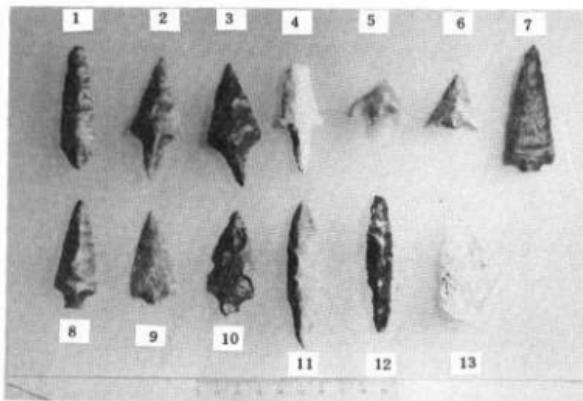
- ここにあるものは、製塩土器の疑いがあるものを掲げたものである。
- このものは、外面は、粗製であるが、内面は滑めらかに整形されていて、やや暗いうすみどり色を内面に見せており、外面は赤褐色を呈している。
- しかし、筆者が「五月女苗遺跡」で分類した、第Ⅱ式としたものに近似するも異質である。

☆ それ故疑いあるものとした、今後の類例を待ちたいと思う。

☆ (C - B - II - N) 出土、(他の土器と混在)

{石鎚・石錐} → (1~15)

S・P・L 1



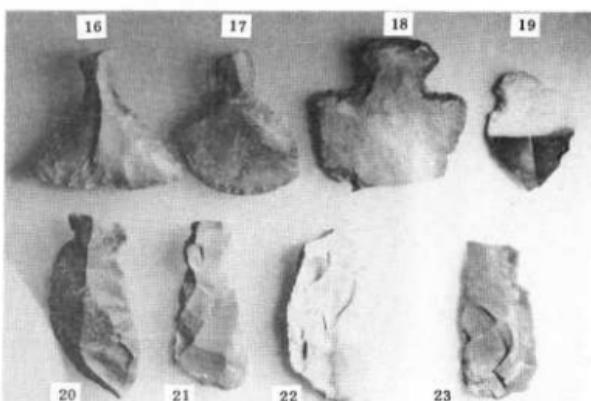
{☆註：12=石錐
14・15=P・L18に掲示}

☆〔石鎚・石錐〕→S・P・L1 (S・P・L18)

- S・P・L1、S・P・L18に掲げたものは、A・B・C地区より出土したものである。このうち(12)は石錐で先端が欠失している。
- 他の(1~15)は、出土した石鎚の全部であって、きわめてその数が少ないのであるが、その形態は多種である。
- これからの石鎚・石錐は、出土層が歴史時代に削平をうけている地点もあり、後期・晚期に属するものであるが、そのいずれに属するものは明確でない。

[削 器] → (16~23)

S・P・L 2

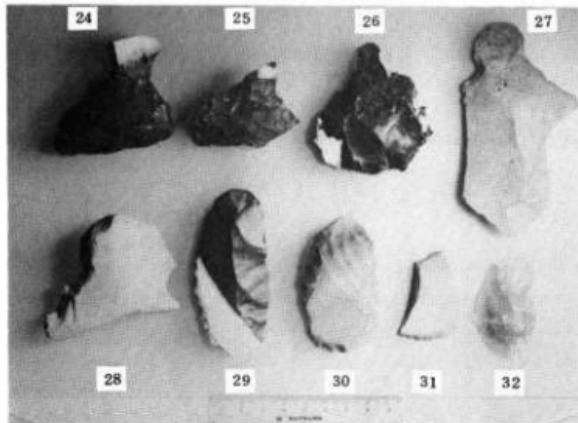


☆〔削 器〕→S・P・L2

- S・P・L2に掲げたものは、削器である。削器としたものは、ものを切つたり、削つたりする機能を持つ用具であろう。
- この削器を、横形(16~19)、縦形(20~23)に分類することが可能である。
- これらのものの出土地区・層位、計測値等々は〔表2〕で承知されたい。

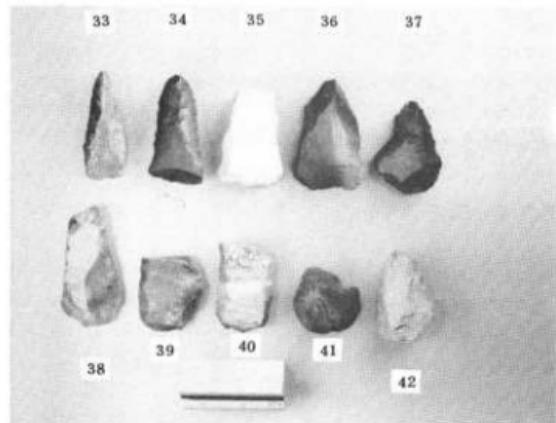
(☆データーについては、上記のとおり以下も同様である。)

[削 器] → (24~32)



S・P・L 3

[搔 器] → (33~42)



S・P・L 4

☆[削 器] → S・P・L 4

- S・P・L 3 に掲げたものも削器として分類したものである。このもののうち、(24~26・28)は横形、(27・29~32)は、縦形または、不定形削器である。
- さらに分類すると、有柄削器、または無柄削器、および不定形削器とも分類することができる。
- なお、(28・31)は欠損品であり、(29~32)は、つぎの搔器の可能性もあるのであるが一応削器としてある。

☆[搔 器] → S・P・L 4

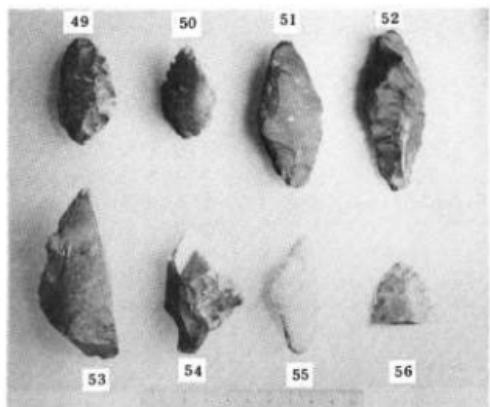
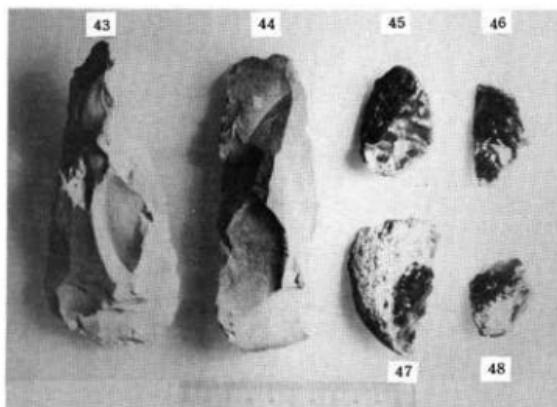
- S・P・L 4 に掲げたものは、搔器である。この搔器は、ものを搔きとったり、削ったりする用器と思われるものである。
- ここに掲げたもののうち(33)のみ完形、他は欠損品(34~35・39~41)で、未完製品(36~38)である。また、(42)は小形の石槍かもしれない。さらに(33)も石槍とも考えられるが、下端の剥離から搔器の仲間とした。

[搾器・黒曜石片] → (43~48)

S • P • L 5

[石 槍] → (49~56)

S • P • L 6



☆ [搾器・黒曜石片] → S • P • L 5

- S • P • L 5 に掲げたもののうち、(43・44) は、大形の搾器である。刃部は、下端にあるが、剥離が荒く未完成品と思われる。
- また (45~48) は、黒曜岩の細片である。やゝ透明で若干の気泡が観察される。

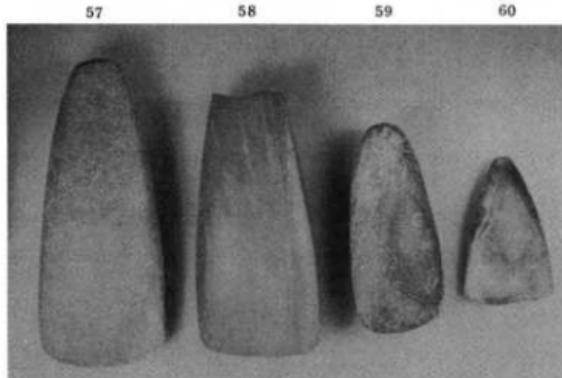
☆筆者等は西海岸地方で黒曜岩の円錐を包含する層を 2 ヶ所程確認している。そのことについては、「一本松遺跡」において

☆ [石 槍] → S • P • L 6

- S • P • L 6 に掲げたものは、石槍である。このうち (49・50) は小形石槍として分類した。
- また (51・52) は、ほぼ中ぐらいの大きさであろう。しかしこの二者は、未だ未完成品であろう。細部加工が不充分なものである。
- さらに、(53・56) は欠損品、(54・55) は、有肩の石槍と思われるが (54) は未完製品である。

[石斧] → (57~60)

S・P・L 7

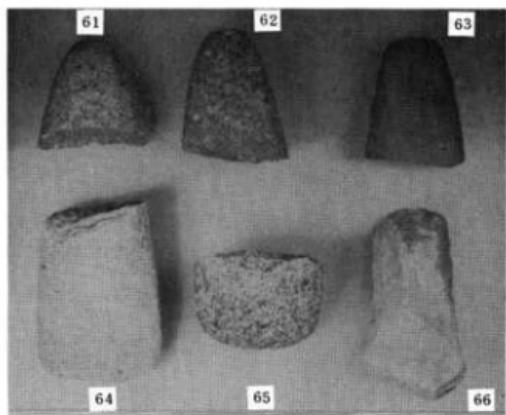


☆[石斧]→S・P・L 7

- S・P・L 7に掲げたものは、磨製の石斧である。このうち、(58)は、上端が欠損しているもので、他は完形品である。
- ここに掲げたものは、いずれも岩質はホルンフェルスである。従来この岩質のものを、他の名称で分類されてきたようであるが、筆者等は、ホルンフェルスとして捉えている。
- (註: その根拠は、五月女菴遺跡で述べてある。)

[石斧] → (61~66)

S・P・L 8

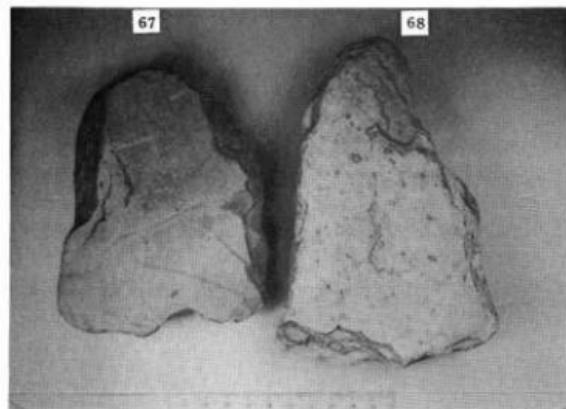


☆[石斧]→S・P・L 8

- S・P・L 8に掲げたものは、石斧・撃器である。このもののうち、(61~65)は石斧の欠損品で、いずれも磨製である。
- この石斧のうち、(61・62・64・65)は、ひん岩製であり、(63)はホルンフェルス製である。
- (66)は、流紋岩製であるため、石斧の仲間に加えた。上端の刃部の形態から撃器の仲間と考えたが、岩質から考えて石斧の未完製品とした。

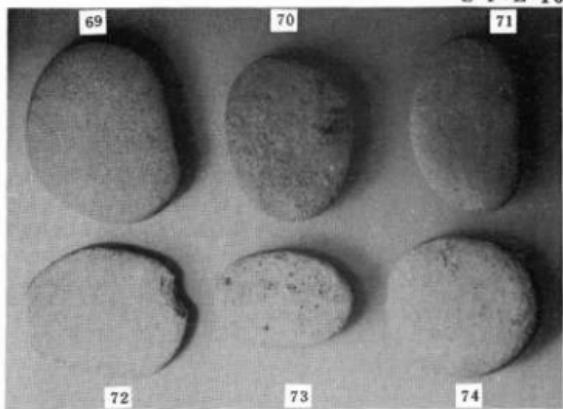
〔鉈状石器・石斧状石器〕→(67~68)

S・P・L 9



〔打欠き磨痕のある扁平石器・石錐〕→(69~74)

S・P・L 10

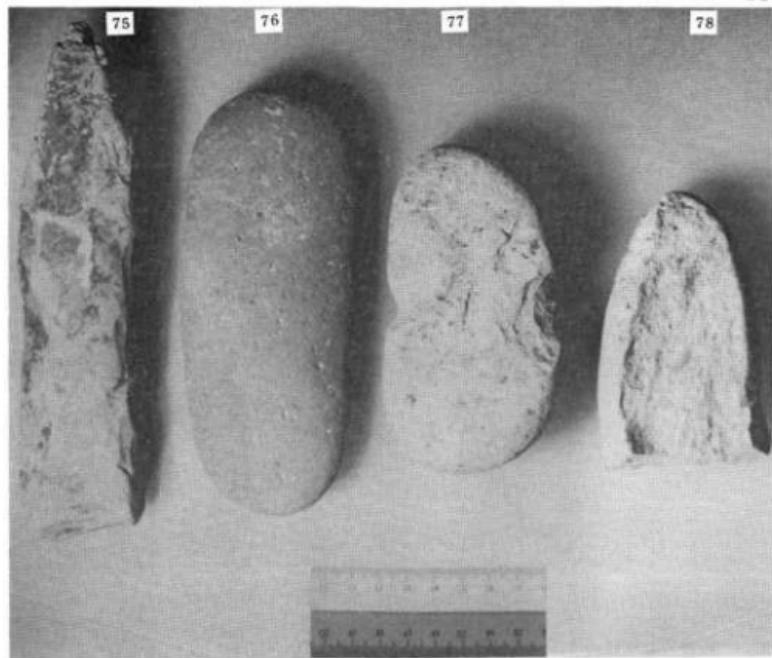


☆〔鉈状石器・石斧状石器〕→S・P・L 9

- S・P・L 9に掲げたもののうち、(67)は鉈状石器、(68)は石斧状石器としたものである。
- (67)は、細部加工が右側刃になされたもので、刃部を形成している。そのため、鉈状石器とした。多分機能的には、鉈と同様の使用目的と考えられる。
- (68)は、右側刃と下端に若干の加工があるので、一応石斧状石器としたが、右側刃の剥離状態から考えると(67)の機能と両機能を持つと考えられる。

☆〔打欠きや磨痕のある扁平石器・石錐〕→S・P・L 10

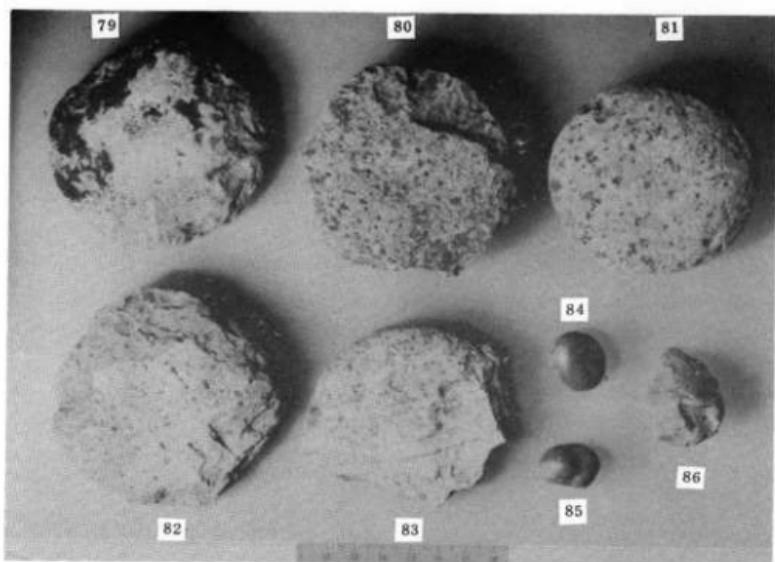
- S・P・L 10に掲げたもののうち、(69~71・73・74)は打欠きや磨痕のある扁平石器である。
- また(72)は、長軸に打欠きを持つ石錐である。
- 前者の機能、用途が明確でないので上記のように表現した。すなわち、打欠きがあつたり、側面、または、面全体が磨痕の認められる一群である。
- (72)は、ノーマルな石錐の一種である。筆者の手がけた範囲では、岩木川東岸には、このタイプの比率が多く、同西岸地帯では、長軸と短軸に打欠きをそれぞれ2ヶずつ有するものが若干多い。



☆〔不定形石器・石錐〕→S・P・L 11

- ここに掲げたもののうち、(75・76・78)は不定形石器である。また(77)は石錐である。
- (75・78)は剥離痕が認められ、なんらかの機能を有するものであろう。
- また、(76)は、下端に打欠きがあり、側辺(左)に磨痕を認めるものである。これらの不定形石器の機能等は目下不明である。
- (77)は、短軸に打欠きを持つ石錐で、一タイプである。

☆(注)昭和48年頃、渡辺誠氏が石錐を詳細に分類されているが、当津軽地方では、切目石錐や有溝石錐は希少である。むしろ、P・L10-(72)のタイプと、このP・L11-(77)タイプ、すなわち、打欠きのある二タイプが主流をなすようである。また、長、短両軸に打欠きを2ヶずつ持つタイプが若干あり、目下のところ、打欠き石錐Aタイプ(72)、同Bタイプ(77)、そして長短両軸に打欠きが2ヶずつあるCタイプに分類が可能であろう。



☆〔円盤状石器・原石〕→S・P・L12

- ここに掲げたもののうち、(79~83)は円盤状石器である。
- また、(84~86)は、自然の小礫ではあるが、ひすいである。
- (79~83)は、いずれも流紋岩製である。このものはほぼ円盤状を呈し、扁平なもので側面に細部加工が施されている。

☆この(79~83)をⅠ類とする。後述する(P・L13)をⅡ類、(P・L14)をⅢ類に分類することが可能である。

• (84~86)は、青森県内には産出しないと言われているひすいの小礫である。このことは、交流の問題を暗示しているということができる。